川柳塔

No. 546

特集・はたらくうた

十一月号





豚饅•焼売•焼餃子

大阪・なんば



TEL(641)0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋 京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

の過 疎化

けて終った。その内秋爽涼の訪れに誘われて はら」も弓削も大会ゆきの切符や宿の手配を 謂「夏児」で夏は冬より快適なのが自慢だっ けではなかったと思うがいかが。元来私は所 何とか立ちなおると、又しても老人の冷水。 念でもあったが関係諸子に大変など迷惑をか 前日になってキャンセルの余儀なき有様、残 の連続。従って約束や予定が総くずれ「たけ た。それがことしということしは、と愚痴話 、かった事は格別だった。そんな感じは私だ

ことしの夏のきびしさ、特に残暑の凌ぎに り法も一席ぶつ。しかし過疎地域に暮らすこ HK連続川柳放送のファンも居て川柳若返え の元気で75才のクラス会とは見えぬ。 女15名、合計年令千二百才の出席。なかなか 校時代の生き残り同級生が集ってくれた。 積した雑用の間をかきくぐるように九州ゆ 毎年の例であるが私の帰省を機会に小学 これはのびのびになっていた墓参のため 私のN 男

の人達の頭も年々過疎化していくのが見える

何としても寂しい事だ。

T 慕 白 特 彼 洗 問 13: 急 岸 う É 2 九 会 答 語 時 12 13: Ľ 3 間 亡 は 13: 2 母: 2 母 2 0 3 0 か 12 0 ず 対 < た 会 炎 話 1) わ 67 天 風 6 た 0 下 4: 3 天 0 Ŧ. き 葉 九 る 寺 鶏 州 頭 路

中 島生々庵 -----

JII 塔 十 一 月 柳



III柳角力の始まり

野 文 庫

長

対し公開挑戦状を出して川柳角力を挑んだ記 柳団体があったが、一方の柳絮会が研柳会に 録がある。文面が面白いので紹介しよう(原 文は旧かな遣い) 昔松山市に研柳会と柳絮会という二つの

知の如くわが川柳も文壇の一転化と共に堂 関心を寄せられ 々たる文学として天下の注視を浴び多くの 度き希望に有之候故 数名の選手を出し 人と雖も等しく希望するところならんと愚 且つ多大の利益ある方法を講ずることは何 とは存じ候え共 より油断なき諸兄なれば日夜で研究の御事 お互いに大いに肩身の広き訳と相成候 たる雅趣を得 固より研究が主眼を以て勝敗は論ずる 就ては御会と当柳絮会とが互いに 諸兄益々御清栄奉賀候、ご承 同時に以て研究の資に供し 更に清新の趣向を加え、 大発展の形勢に相向 句を闘わして以て発溂 御承引被下度期待致

秀句

鑑

賞

1

同 (近作柳樽)

人吟

若本多久志·

富士野鞍馬

40

傍島静馬

27 29 28 47

「旅人」以後の麻生路郎作品…



し以て柳壇に濶歩するは快心の至りに候わ 處に非ず 伏而御願に及候 左記規定御覧の上御回答賜り度く 研柳会と柳絮会が互いに相提携 謹

明治四十一年 月七日

絮

菊沢小松園… 東野大八…

41 39 26 26 21 21

42

吉次郎

研 柳 会 御中

きのう・きょう.....

鉄児・水車・祥月・酔々・トク子・修史・弥栄子・岳人

高鷲亜鈍 麻生葭乃…

:

初歩教室……本田恵二

中筋三幸…

本多柳志…

46 47

が分る。 に六十五年前に川柳が非常に盛んであった事 の公開挑戦状が見つかった訳であるが、すで 々長の越智水草氏で当時川柳名「緋威子」 ところでこの挑戦状の作者は現在松山子規会 鋒、三鋒、副将、大将などとあるのも面白 手名などを列記してあり、選手名に先鋒、 云う松山商業五年生十八才の少年である。 最近ひょっこりこの時の新聞が出て来てこ 而笑子、 後記の規定には五人を一組とし、選者は窪 出題は選者、 発表紙、世話人、

も大きく変っていたであろう。 動をしておられるが、若し氏が其後ずっと川 現在も尚お元気に文化活動をしておられる。 柳活動を続けておられたら愛媛県の川柳地 県文化懇談会役員などに関係され積極的な活 副部長を最后に勇退されて郷土松山 前記子規会長のほか、史談会、ペンクラブ 越智氏は後日大阪朝日新聞に入社し文芸部 へ帰られ

シャッターを上げ秋雨を聞きに出る 塗り絵みな中間色のもどかしさ シグナルは赤人妻のおもい断つ



本 水 客

大阪市

正

つげ口は計算にいれている微笑 風を母に能登の太鼓を生んだ波 大海亀との対話 海鳴り聞いてる眼

プウェ ホテルでお刺身などを召しあがり イ樹氷のことにふれて夏 磨崖仏まひるの陽射すずしくす

山上の 1

香川県 井 酔

夢

ブレーキのかけ過ぎだよ過保護だよ

うたがいも持たず陽に咲く日照草

いつまでも待ちくちなしの香がうつり

思慕秘めて挿す一りんのバラ白磁

島 鉄

脱都会蚊帳の青さを嬉

しがり

女房もびっくりなさる珊瑚婚

うちは庶民米かと子にきかれたり

門真市

福

児

四

尾

栞

選

生きぬいて夫婦還暦だけは無事

還暦の妻をねぎらう輪を囲

初孫男子誕生 (三句)

男子誕生あとは好きな子産みなはれ 血統を継ぐ勇ましい弧々の声

命名へ日本一の名を見付け

倉敷市

本 田

恵

朗

書き綴るドラマのペンに老いよぎる ほんとうに粗品をくれたからうれ

日帰りで鼻の頭を焼いてくる あばら骨土用の波になめられる

青森市

I.

藤

甲

敬遠の ぶらぶらと居れば隣へ借りてかれ 四球で顧問などにされ 岡 山県 浜 田 久 米 雄 群れ 角 なパンにも縦と横があ 出雲市 0 尼 緑 之

飲み

反抗へ見事に干したコップ酒がつまでの寿命か晩酌だけは飲いつまでの寿命か晩酌だけは飲 た命をきようも大事がり

にんにくの匂いへ遠慮しない年

豊中市

P

古

方

日

衣を更えて早発ちす

何を三 真面目やとひとりでいうてるだけのこと かもの決めて手となっておった土

広告にみな煩悩をくすぐられ

夏なり秋なりフォルクス・ワーゲンの白

大阪市 坂 形

水

傍 島 静

寺巡りなどして涙もろくなり

心から酔えない酒のなお淋し

転任をする子へ冬の物揃え

晩飯に来いと岡 解説者の

山から電話 など耳障

処生観

b

だんだん減ってきて老化 っぺん座ってど忘れ思い出し 宝塚市

バックボーン有るよな無いよな御別宅で喰べてあたったとも云えず

ックボーン有るよな無いよな御曹司

金遣い もうい

馬

をなす鳥造成地 \$ 旗

ミニのひだきちんと長 63 赤 電

助

火読んでも見たが身にならず つく稼いで夜は犬を連 れ

山頭 がめ

似たとこがあるので嫌な拒否反応

島根県

藤

井

明

朗

まだ気がつかず先手に教えられ 父の死 波瀾万丈父の死へ涙する柩 へ孝行ならず悔 残

ライバルに先手取られる日の不運

父の死へ僕の人生かみしめる

Th

若

柳

潮

花

風鈴 御神燈へ男待たせて灯を入れ へ浴夜の染めの 包う風 3

老い囲う身に派手すぎる舞い扇 露と寝た思い出だけで散る野花

靴音は君の歴史の音がする 紫香君勤続五十年

みの虫も揺れず残暑がきびしすぎ コップ持って見知りの 人が寄って来る

尼崎市

黒

JII

香

もう山は秋の音して草ゆれる

絵のように干して洗濯みち足りる	東大阪市	台風禍この青空の偽善者め	球を円くする夫婦になる儀式	白百合の白さもいつか子を妊み	皿欠けておんな嫌いになる河童	退屈な聖女が重い皿を割る	八尾市	人生に故障があって生きる甲斐	まあ云えば秋茄子に似たよい娘	満員車雑念黙念向い合う	孫の会曽孫を抱いた孫も来る	ノンポリの日和見揺する赤い風	内外問題(一句)	大阪市	水入らずカルピスのんで句を論じ	葭乃先生と	恋だけでなし金も盲目にする	なまじっかの宗教心が邪魔をする	浴衣会扇の角度そろいかね	読むまいか「恍惚の人」へ考える	大阪市	湯煙りも見えず有馬の宿の屋根	有馬	信号もあり六甲山も交通禍
	久						高							福							Щ			
	米						杉							井							JIJ			
	奈 良						鬼							野迷							阿			
	子						遊							路							茶			
仲人の四角に座るいい日柄	先見の明まつ先に酔いつぶれ	大阪市 本	自家用で帰れと故郷もアスファルト	ブルドーザー秘境へ野暮な音をたて	コンベアーに乗せられ黒部湖美女平	嘘言えぬ男で黙秘の目をつむり	先生を往生させた子の論理	岡山県 浜	姉妹の不器量な娘が先に嫁き	パラソルに女の自由がある日照り	世辞のない母の批評へ少し拠ね	もう孫の姿夢見る結納金	多忙さえ生活のリズムとして感じ	米子市 林	いとけなき眠りを虫の夜に持つ	娘の恋を見守る日々よ紫蘇におう	ノーというべきたかぶりに草むしる	恋ひとつ生んで風紋影つくる	秋風や一気呵成に義理果す	米子市 八 .	かたくなに閉ざせば墨も固き色	一生を托すと見えし筆も添い	淡墨のひそかに放つ愛と識る	フト開く恋鮮やかに花かたみ
		多						野												木				
		柳						奇						瑞						千				
		志						童						枝						代				

次の 老い 発展はしな 貰い泣きし 峠から墨絵ぼかしの 掃除婦と守衛がたっぷり裏話 川端さんの活字コツコツ不死鳥が拾う 風 黄菊白菊陛下も式辞馴れ給い マンションに暮 たとえばにしても気に 船が飛 言葉は、 ては子に 崩れる冬の雲とな ぶ日の夢は紫に いがの ながら扇風機を廻し ビールの泡に吸いこまれ 從 67 して四季を見失い れ 孫に 雨が降 んも下ろさない 使わ なる話しぶり 3 れる n 松江市 守口市 中 羽 11 原 晃 静 男 步 渇き来るような葉ずれに音は 老犬に膝貸している虚脱感 夏バテの言葉少なに妬心抱き デモ 新涼やサラダを盛 消夏法妻はきちっと帯を締め 堂々とした出雲弁に胸うたれ 未完成の恋はみんな美しい 東西南北僕はどちらへ進うか 心 雨降って地どころか溶けて流れ出 立ち詰め 0 隊 傷をなおし の歩道越しなるおでんの灯 を覚悟それでも故郷へ乗り た医者は って嘘を聞く 妻でした 富田 松江市 秋 林 市 岩 柳 田 楽 美 鶴

木犀が匂う妻も好き僕も好き株のたい気持ちでネクタイ結ばせる機ったい気持ちでネクタイ結ばせるしたしたしたの様子したの後不足と一緒に乗り合わせはている方との後不足との後不足との後不足との後不足

高野山吟行

行

間のチェックはわからない新語

万九

百五十日この上積みがわからな

62

どの顔も一対一

の肩

を組み

翁

務三十年表彰を受く

松江

市古

逓

便箋の余白が一日また延

児 結果的には利敵行為となった策 似た欠点をもつ子を力なく叱り 名月だったのか残業の灯を消して 午前零時ラーメン屋にもこんな客 ぶらさがる鍵 日をきれいに捨て でるのに老眼鏡を拭いてい 0 つがなくもてあまし た高野の灯 倉敷市 倉敷市 3 水 野 粉 素 Ŧ 身

代

丸

郎

平凡 ペンと云う味方があって消ゆ孤 満ち足りて光陰将に矢の 裏門は閉めてあるからすぐ開 胸襟を開くと云えば嘘に 終身刑死よりもつらい生となり 凡人が酒でまぎらす自尊心 表向きだけの朋友相信じ 栄転を見送る側で二十年 科学した世とも思えぬいい月夜 日の丸が揚がり茶の間もふく涙 美人ではないがと心の美を賛え また坂を越えて夫婦の歩が揃 押せば引く道理は知っていた裏目 見破られそうで仮面のむずがゆさ 刃物より飢はするどい刺を持ち それとなく傘で隠してやりすごし 寝て起きて食うそれだけの 欲求不満色の残らぬ旅をする 袈裟までは憎まぬ男の政治性 なくら て敗北感に独りいる しの良さが解りかけ 如 なり 富田林市 難かしさ 鳥取 倉吉市 大阪市 き 63 県 清 木 奥 中 村 谷 水 JII 弥 弘 栄 子 朗 保 雀 真実も混え言い訳練る歩巾 満ち足りた生活のゴミが浮 独り旅の日暮れへくもの巣がたの 露草は小さき地蔵に手向けん 光背を虻軽業のように抜け 星月夢仏の五鈷に星降 石仏に茫のつくる波がしら とっぷりと暮れて山里水の音 背を赤くして夕焼雲が走ってる ちようちよう発止!人工甘味のような世辞 赤い血が燃えたはたちに子が育つ 背のまるみ気づかれまいと胸を張る さっぱりと刈った頭でやる気魄 真剣になった目玉を恐れ 公害の街に寄特な鳥が住 北畠の哀史庭石だけ残り 晴天は眠ることにしている蝸牛 父として見えぬからでは済まされず てんとむし止まり仏の耳飾る 美杉村上多気に旅して(四句) りぬ られ 7 泉佐野市 八尾市 島 か 根果 香 堀 江 万 11 酔 万 白 IF.

朗

汀

的

K

善人が一人ここでも朽ち果てる 手をそえるどころかいきなり足ばらい 意地を張るとりなす声を待ちながら 和歌山市 垂 # 葵 水 この 法律上 大の 職に生きひ 男がクルマのけつを洗う 妻の重みが増してくる っそりと行き帰り 大阪市 児

城に月街の律動乱 れな 42

大陸とつながっていた古代墳

魂胆 苦労した話の順序もう憶え の見える誘いに乗る自信

鏡見るときも素直でない女

君が代は聞きあきぬもの金メダル

停年の守衛が抱く歩哨感 対等と思えばマナー買ってやる

松茸のはしりをつまむ赤い爪

妻の幸まな板の音冴えてい 磯釣りの事はくわしい紀州弁 3 倉敷市

小

野

克

枝

友訪えばおむつの 平凡が欲しく競歩の列を出る 風 のさやかなる

転んだ子笑って走る高

62

空

わが娘を女と見ればいやァな型 過去が癪にさわり金儲けたい 墓の前云ってはならぬ事を云う 大阪市

有

信

新

之 助

自分から振った女に似た後妻

大 矢 郎

鞭振れ

ば風が抵抗するばかり

導火線の

向うに蒼い海がある

新宮市

登山 靴履き鈍行の切符買う

黒と赤混ぜたら僕の怪獣だ **鼡算父として何時死すべきか**

惜し カセットテープのお経電気のお燈明 片腕のつもりが当てにされていず まれて死にたし長生きもしたし

大阪市

金

井

文

秋

女である事を忘れず距離を置く 救われぬ女ばかりで座がはずみ 大阪市

つつがなく大任果たした孫の守

宮

尾

あ

き

高 野 陷 行

御利やくを信じてメッキの指輪買う

変身美和服の君のパ ンタロ

5.

呂

志

怒りまだ残したままのサングラス 云い過ぎたあとのわびしさ噛みしめる 島

邪魔された不満は妻に当つとき 汗拭いたついでに鼻もかんでやり

秋来ぬと定かに見えて雲流る 抱き寄せる腕は仏の安らかさ 中国長沙の馬王堆古墳発掘 死んでいる間に二千年が経ち 天阪市	高植えて蔓のゆくえに夢を追う 土用干し女の見栄を窓へ寄せ 紀南に旅して 経南に旅して 兵庫県 蜘蛛の糸恋にたわむるのもかかり	別荘地などと心をゆすぶられ 根性がほしいと母が欲を言い 朝の鏡に心の焦りまで写る 二十年さき想いつつ髪を梳く た阪市 ネクネイの巾本心を隠すごと をかがなくて人生まだ迷い	気に入らぬ髪で一日落着けず 混浴で自分一人の阿呆らしさ 大阪市 大阪市
太	遠	河	//\
Ш	tŢt	野	出
良	可	君	智
子	住	子	子
明日夜逃げするとは知らず押した判は終をしてほし歳だけはとってます構談をしてほし歳だけはとってますがでいたがある。	竹す々 る香で 原市	高野山合同吟行(一句)	東大阪市 宮 東大阪市 宮 東力の差とは云いかね運にする 実力の差とは云いかね運にする 実力の差とは云いかね運にする
小	I TI	志	宮
島	内	賀	西
巅	静	木	弥
幸	水	石	生

初めて ライ ずばり云えと云うから云うて仲違 ご先祖を引合いに出す浮 集金に行けば独身かと聞 生計をペンで立ててて胃が弱い 平仮名を横書きに 家建てて今度は墓が欲しくなり 苔むして顎に掌をつく石仏 悪口を言うたら鼾ふと止り 唐もろこし焼く香につられ買わされ 大倉山シャ 結構なで身分ハイミスと言われて 公害は生駒連峰超えはじめ う巻きです目薬は 金通 毛女へ + 奈良霊山寺にて(一句) 0 ルに 上 帳マイカー F. の北海道の旅の 四十 才 エヤー は ンテ見せ物として残り まばゆ 歩譲 ~ 白髪が抵抗 ポケットにベルト ルト悲 してペン哀 どの鰻入れ 42 を買うまでのも って時期を待 まで 膳 気癖 かれ きも 0 和歌山市 東大阪市 大阪市 0 駒市 0 0 締 詩 0 10 3 35 野 草 竹 村 深 中 太 酔 弘 綾 茂 津 升 女 生 一生に 一 雑音 結果論 黒眼 学僧と云うを息子と比べて見 サボテンも蟻も乾けり恍惚の人 坊さんがビルから出て来た本能寺 信者ではない観光で行くお寺 大の字になれぬ我が家の畳数 陽のあたる道へ歩巾を整える ふれあった心遠い 蟻の列今日の獲物へ残業す 切り札を抱いて罵倒へやわらかく 妥協点罵倒の峠を越えてから 眼 数の手で墓土の 検 畝に六十 恋受話器の奥で時計 鏡 の一つに僕の生きる音 事 江正朗氏還曆 今日 創 洒落のつもりが怖がられ 云うだけ云わす他はなし 度の御籤 は 一の秋が澄 ゴルフを賭 父の 青春を他人めき 値踏みする商 ける爪赤 みくじ 鳴る けて打ち 63 魂 橘 JII 島 高 Ŀ. 居 大 薫 白

めば涙に変る恍惚

輪

酒

風

不 田 三夫

暗闇 の階段いちどは昇らされ

H 中国交ひらく (47・9・29

調印にペンおっぽりだして毛筆と毛筆 東海林太郎七十三翁逝く(47・10

歌終る「直立不動」の四十年

ほんとうの年を云わないのも芸人 老芸人もう焦らないあせらない

飯田市にて(一 句

半パンツわが影老いたなとおもう

扇風機の前へどっかと生きかえり

街路樹もりんご飯田のド根性

七十へ三度日の嫁嬉々として

岡 Ш

直

原

面

Ш

Y氏結婚

河 村 Н

満

宙吊となっても子蜘蛛あわてない 高野山吟行

好きなだけでは且那として行けず この侭で行こう定年なさそうだ

この路は高野聖も歩く道

名古屋市

吉

田

水

車

勝名乗り祖国へとどく水しぶき 口君水泳100に十六年ぶり優勝

鰻どんぶり鰻をあっちこっちやり

脱都会命があると言うばかり 秋風や弾力のない顔を剃り

愛媛県

渡

辺

暁

童

内助にも外助にもむき妻上位 着物きてみる女房にひまがあり

あれもこれも出来ぬと知るも悟りなり 知人入院

病人にペースを合わす声音なり

宇部市

石

JII

侃

流

洞

少年の肩を信じた小鳥の瞳 軸替えてすすきリンドウ座敷 秋

二学期へくらし

0

リズム整える

大阪市

西

出

栄

残り火をかき立て紅を引く女

照準が合わないままに恋破れ この恋は逃さじと娘も二十八

灯を消してからの女の猛りよう

じ花なら蕾のうちに嫁ると決め

ーインガム噛んで仏へ手を合わせ 高槻市

福

T

路

チュ

本家本舗元祖に惑う土産物 マイカーの凄く凹んだ横っ 後の祭の白紙委任状 腹

藤井寺市 西

11

わ

を

喧嘩していても長屋は義理を足し盆すんで長屋落ち着きとりもどし朝早く犬の散歩という生活し	が産れ愛がすべて	大阪市	殺しよう非芸術的に世はなりぬ	変身のパンタロンに息をのみ	僕の胸いろんなものが巣喰うてる	古河御所の妖気をいまここに	伊丹市	七色の一と色すねて見える虹	蟬の声昼のいこいの茶をすする	対話する友しあわせの中にいる	腹立てる心はじっと耐えていた	松江市	奈良格子スキ間を走る夏の色	餌をもらう手だと知ってる十姉妹	しがみつく命を笑っていたカラス	落人の民話に雪のある月夜	桜井市	七盛塚哀史がつづく苔の色	平家一門の墓	夏やせの胸聴診へ骨の音	建売りへ振向く停年目が変り	ギャンブルにかけ人生の急直下
		木村水洞					小川静観堂					岡崎祥月					岩本雀踊子					
お粗末な保障平均寿命だけは伸びこれだけの汚染に不思議と生きておりこの顔がああ変るのか母娘連れ	cie	貰い物それも収入源へ簿記	節くれた指が器用に観世撚り	揚げ底の世相歩まん真実一路	老軀なお特殊技能が酷使する	出雲市原	現代っ子の夢のスケール小そうなり	折衷案出して出方をさぐって見	すきのない男にあった読み違い	我を張って互に相手の出方見る	大阪市 河	鎖解いた前進に壁があり	狐にも狸にも化けて一人旅	弱さにも強さにも徹し切れず	ありがた屋病気してもありがたし	大阪市 天	山裾に住み蟬に明け蟬で暮れ	朝顔の自由隣りへ手を伸ばし	漫画には持って来いじやと俺の顔	捨てられた長男二男をまだほめる	姫路市 梅	隠岐改
	田					1/5					井					正					谿	85
	瓢					独					庸					千					施不	
	太					仙					佑					梢					酔	

保護 春に 孤独との対決夏水仙がまっ白い 定年の二人へ広い日本地図 雨 ゆれ動く愛をみつめて天の川 プロポーションイメー 賽銭は投げず打算の手を合わせ 秋暑しすりたる墨がすぐに消え 增築 激動の世が労わりの心消し 不規則な務めで愛がよけい燃え 真実を語ろういくさのことならば 老人ホームもあると小五の長男に言 眺めるも仕事の内と云う庭師 層 の塔ほのかに王朝のリズム持つ の背を流し偽りいい切れず 下 色の欲 無い を生きる意欲の石を積 高野山吟行雑詠 余りかばってコースから外れ 嫁り秋には貰う忙がしさ 貯 すぐきの里でもの足らず 金通 しい日があり中年の 帳脆かった ジ崩すサングラス t P 京都市 神戸市 今治市 宇部市 われ 1 江. 越 7 浜 城 Ш 智 牧 杜 実 人 的 史 水 男 スモッ 心にもない事云った岐れ路 タッチして蟻は次の餌に走り なまじ才女不幸の影を踏み歩き 人類の跡目は只今審議中 忍び寄るどころか音をたてて秋 検討調査審議答申何もせず 日本列島湿った舌になめられた 道訪えば上って下って京の街 手のエクボまさぐる膝に崩れて来 極楽も地獄も同じ渡し賃 犬猿の仲でも可愛い児が生れ 答弁へしばし思案の眼鏡拭く 口下手の取柄もたせば筆がたち 土砂降りを待って農家へ来る債鬼 療養に手ごろな坂の松並木 金 憧 画 魚の死夏の最後の夏閉 かれた都会に背く旗を振 ザグに歩いて探がす妥協点 何回もその感激場 グの街 ヘチョウチョがヒラヒラヒラ 面追 古 15 0 岩国市 兵庫県 岡山 平田市 包敷市 県 小 弘 河 池 久 原 家 幡 津 H 3 代 里 柳 古 0 仕

3

男

心

風

慶

ホステスの化粧手足の瓜までも	大阪市 水 谷 竹 荘	税金もかけず政治に遠く住み	血圧が上る困った客が来る	プロレスのよいとこで切る客が来る	神さまも微笑拾円の願いごと	姫路市 大 江 秋 月	減るとこも僕とおんなじ孫の靴	出すものを出さなとどけち申されし	Y氏の謦咳に接す	眼を閉じても一つ眼のある化粧法	夏の日へ銀行ギリシャの顔で立ち	神戸市 仲 どんたく	大学は出たがオフィスのピエロです	お茶引いた夜は故郷を抱いて寝る	食虫花のように男を喰うて生き	人力車飛び出て来そうな倉敷市	倉敷市 藤 井 春 日	退職をしても元校長の折目	薬草の貧しく四季を知って咲き	胸リボンつけたばかりに雨に会い	温泉で北枕等考えず	小松市 馬 場 魚 山	処世術とこらで僕が馬鹿になる	小さい意地通して茨の道となり
一日中寝ていてもライオンと云う鉄の檻	京都市都倉求	死にようを気にする歳になっていた	老母心ながらと釘をさしに来る	煮えたぎる腹の内なり宮仕え	目覚しを持って単身赴任発ち	姫路市 村 上 春	農協に汗の代償差引かれ	補聴器へ念押して出る農繁期	過疎まもる老農案山子へ金釦	秋灯下挙式へ合わす老母の針	岡山県 出 原 敬	受付の笑顔へ花瓶の赤が邪魔	エリートの小さなミスが許されず	道ずれのブランク女よう喋り	事なかれ主義ざくろが実をはじき	呉市 林 野 甦	訓練のときはすぐ開く非常口	難点は陽気葬儀屋に勤め	兎より亀を信じたマイペース	長髪を非難床屋の語がはげし	美爾市安平次弘	靴すべり今度はいつとただされる	だ生きているよと海老ははねて	フランスのムードでホテルの食事する

光

道

巳

芽

恍惚 眼をつむる見えないと思うている逃 肩をよせ合う歩巾心は別に持つ 武器持たぬ民族愛国心に燃え 生甲斐は子供の為めと子に云わず 雲に手が届く高さに来て背伸び 雲走る峰に孤独を笑う風 処女蜂へ闘志が湧いて来る画集 サングラス人間逃避している気 墓標などいらぬ男は山が好き プラスアルファ加減乗除した人生サ しよつちゆう反省してしよつちよう忘れとり か々の き捨てに出来ぬ寝 び返えし見ればこちらにも落度 切れた楽しさ今日の大ジョッキ 一公が雨を忘れてきた暑さ 0 てても抵抗します女です 0 愛は時間を止めている 華麗薄命の舞いをまう 無い方法について来ず ルの心は乾き切り 言が起される 富田林市 大阪市 大阪市 倉敷市 市 避 板 神 谷 河 植 谷 股 井: 尾 凡 緑 英 岳 九 水 詩 水 人 郎 手榴 手を握るまでは自信のあった恋 硫黄山草木を枯らすすさまじさ 平凡もうとまし切手ハスに貼る 社会学の中に小さき修身書 阿波生れ阿呆踊りの先に立ち 久々に友の声あり鮎に来い 応接間広告マッチ下卑て見え 社の赤字二号は暇をもてあまし 人生に定石はなし運不運 妬きすぎる妻にもあっ かぶと虫俺を子供の眼にさせる 器用さが邪魔 北海道直線二十七 街路樹は続く赤い実のナナカマ いすんで日が暮れて一本膳に乗り の演技を演技の恋に教えられ ルバイト知性殺している日焼け 北海道の旅 の家並は低し小さい窓 弾不発今日迄生きのび して日曜休まれず **の道 た倦 東大阪市 東大阪市 怠期 広島県 鳥取県 島根県 高 竹 鈴 斉 谷 藤 木 橋 中 鬼 無 +

JU

閑

焼

人前 午後 特売 改造論ばやり土竜が動き出 よろめきとも知らず廻転ベッド オリ 窓ぎわ 姿見に アスファルト 中 故現場板金屋が見舞に来 さえ生きる意欲 か 五時の の指輪見せたい も気にせぬ若さ妬 と言えば公害見舞 0 ンピックすんで寝不足取り戻し はよいことづくめ ある妻から先に折れてくる 目の靴もおんなじくせにちび 子のリズムへ唄をのせてくれ 6 丸さがわらう二 チクワの穴が大きすぎ 0 いま見た夢を見放され わ 0 びる 机にはたちの頃の 時報休日 陳情ほ だから移植の土がない の目 0 0 もう終り とか かくしたい 0 われれ まし H が ベルを押す 酔 れ を聞 購 61 63 竹原市 東京都 わ 松江市 # n 四山県 山市 一廻り 增 森 横 怊 JII 井 松 Ш 端 普 次 叮 柳 居 章 紅 声 子 幻滅 砂時 軽 納 保護色にかくれ自力を見失い 年金の話仲間に俺もい 夢はよし歩けて二次会三次会 病状を語らぬ主治医髭剃りや 気休めもこよなく嬉し寝たきりの 寄せ書き拝受嬉 有為転変星と話した昨日今日 怒る日の 身から出た錆 一人っ子夫婦が別な夢を賭け 急ぐま きもも 組まれた罠ならかかろうじやな 得 ラ 計 のしかし向こうにある灯なら 感持たぬ対話の空転わり のゆくまでただすつぶらな瞳 さえ過去へ戻れぬ輪をひろげ はぬぐえず夜 7 将に淋しきもの の唯晩秋の い転ん 地でゆく愚かさも凡 石 は一直線に飛ぶ だ過去の 雨だれを見てあかず しくもあり淋しくも 木の葉の 0 ペン尖る の果て 3 疵 痛 富田林市 大阪市 to 尼 大田市 心崎市 63 か 字 高 浅 松 田 谷 津 JII 下 軒 徹 徹 梁 八 太 舟

郎

水

楼

也

バックミラー平々凡々な道が見え を押しを背中で聞いて靴を履き 冷房をとめろかけろの二派あり 来年度予算土嚢のままの土手 条件をのんで女房と停戦し 堺 市	かかる世に違うる角へも見きまたした学を出して我が子の性が知れ大学を出して我が子の性が知れてれ以上野ばなしにすな若い血をこれ以上野ばなしにすな若い血をもう一度握り直した掌の温み切らぬふりさせる心が後向く	て が と 調と で 男を	不魔をするみたいで歩けぬ中之島 何も彼も正常ですとドック云う の強妙法山へ響かせる
伏松	時	葛	今
見本	広	城 伊	西
茂 忠		₩ Ξ	章.
美三	路	郎	雅
高野山吟行 奥之院願いはみんな違うよう 中山寺にて 中山寺にて 界 市 がしい命をたのむ岩田帯 堺 市	片手に人形を踊らせている手内職 大手に人形を踊らせている手内職 がすましの波紋は水に生きるため がすましの波紋は水に生きるため がすましの波紋は水に生きるため を地のまま生きて来た過去暖める	八尾市心の虹炎えねば明日へ生きられず山の剣裁ち切り仰ぐ陽の眩し心の鎖裁ち切り仰ぐ陽の眩し美しく老飾り度き三面鏡	大豆 人違いだろうとぼけた憎らしさ 一人来て二人で歩るく御堂筋 一人来で二人で歩るく御堂筋 が智山巡拝
うな顔市	あ 林 た 吹 内 職 る 市 め	八尾市	交がれ
の	和	影がる。	行れ
	和田田	帯ず 清	行れ
吉	和 田 維	策ず 第 飯 黒	fin

勝って泣かず負けても泣かず胸を張り (ボーヤンはほど合う手の温み 松本山知恩院信行奉仕にて(三句) 総本山知恩院信行奉仕にて(三句) 単一人の虹にとけ合う手の温み	える	陰橋で虫うる男秋の風 もう一度夢よサルビア燃える秋 物忘れそれもよかろう茗荷汁	悲しみの顔撮られまい化粧する 堺 市 高 橋 千 万 子気が利いたライターつかずまだつかず 十三才ガールフレンドの事を言い	は 3. t - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 - 1 -
死ぬまでのそろばん弾いて子に譲り 大阪市 西 川 誓長者番付ヤジ馬として読む庶民 一 大阪市 西 川 誓死んだ子の年を数える左遷の地	お言の口数が増し故郷近し 倉敷市 竹 内 翁を足しつぎたしお庭どろなり	過疎だなとつくづく思う芒の穂 出てこいと言うが迎えにまでは来ず	故里へもうけ頭という車変媛県村上旭だ々と貫通トンネル多い旅となる	大事場は西へ西へと活気見せ 正事場は西へ西へと活気見せ 工事場は西へ西へと活気見せ 本島市 山 田 季	島取県 森 田 布金メダル七つも貰いこそと去に シュンヘンオリンピック 敗者から握手求めて爽やかに

死ぬまでのそろばん弾いて子に譲り

童

童

賛

堂

春

空は灰色と云う印象の子の絵具 しきたりの中に明治が生きる家

大東市 ± 岐 1

子

it

親と子の訣別非情に押すボタン 甘えたい気持逆らう唇に負 さびしさは息子の「頑張ろう」の受話器おく

高 木 桃

里

親に買わせてスピード違反まで払わさせ 寝るときも起きても孫のそばにおり

追越した外車を追越しする若き

袁

菊 沢 小 松

年頃の昼寝裾美しく整える 二枚貝一枚ずつで役に立ち やどがりの目から遁れてもとの貝

漬物がいつちおいしい老夫婦

まんだまだ之からですという握手

祝還曆堀江正朗氏

いらいらに堪えねばならぬ六十路我

白玉にまされる伜もて余し

キリン草有刺線の中で咲きほこり

ことずけの駄目押しに行く夜の道

超ミニの

後丹念に歩道

村 好 郎

JII

歯車

の理窟は労使悟れども

一杯生きた落葉に心置く

若 本 多 久 志

育つもの育てるものか人も木も しやれ交わし再会遠き人送る お隣りの小まめを妻は褒めちぎり

> 老いて子に従がえぬ性我ながら 先斗町二階に夢二 古都慕情吉井勇の歌碑に佇つ 画く女

傷口をなめ合うように老夫婦 老妻もやはり入れ歯を洗うとり

医学部卒業三十五周年クラス会三句 (四七・九) 北

JI]

春

巣

年寄りが先祖の法事思い 物忘れ宝くじ買うたのはおぼえ 二次会はみんなジュースへ手を上げる クラス会やっぱり万才して別れ クラスメートみな貫録の顔になり 出

西 尾

栞

をお願いすることになりました。 JII 高鷲亜鈍氏を『顧問』として、よりご協力 雑 時代の /洞友/ 麻生葭乃女史、

東野

大

告

JII 社

社

悲しければ

醓 亜 鈍

高

詩をかいて人間八分村八分 絶対か混頓か思考がどろどろ 解れた過去抽象画にしておきたい 闇くもに詩とは何ぞや闇くもに どろどろの道をはうようにしてあるくぼく 人間も自然であるとローレンス 皮膚押さえ骸骨へ爪入れる 真生児抱きあげられてする欠呻

悲しければ悲しきことを詩にか 恐いものなし生まのいのちで泣け赤子 屑かごへ文字にならない詩稿増え き

どんぐりコロコロみどりを知らぬ子が真 腕章をつけて会社を笠に着る 安定所に写楽好みの顔も居る ほり下げてみても夫婦の名につかえ 紫が好きで本家は姉女房

役立たず易者が押した太鼓判

薄の

穂

逆らうことを知らぬ揺れ

大洲市

米

沢 暁

明

仲裁をして痴話喧嘩買いかぶり 聞き流す初耳ショックをかばう膝 H

曜

でも出勤

老後の

勤

無駄銭をつかわず招待旅行みじめ

須坂市

高

児

近

詠

弁解に嘘もまじえた淋しい 来賓は坐り遺族ははみ出てる 入選詩それはみのらぬ恋でした

軍鶏首をかしげる庭に唐辛子

今治市

月

原

宵

明

無果花もざくろも口をあけて秋 夜生きる女のひるの湯の道具

岐阜市

市 JII

魚

文 庫 顏



川傍柳初篇研究

() 十二

清 岡 前 田 井 峆 喜 代 人 義 丸 高 JII 岡 須 田 啞 柳 = 府 味

甫

風

風呂敷をぬしの出る迄遣ふ也

―遊里句かと思うが、

落語

663

不詳。 遊

で我々の家庭でもよくあること。

し」は持ち主のことで、 「風呂敷」の柳化ではあるま りた ています。 っているのである。生活句。なお藤井説の岡崎=誰かが置き忘れていった風呂敷を使 落語「風呂敷」は明治初期のものと記憶し

川端川「ぬ・

丸・岡田二高須説賛。 壱分のうけ取御休なされませ

だが、ついついのびのとびなり、相手が取でがあったら持って行こうと思っているの風呂敷を持ち主が来たら、または何かつい りに来るまで使用していたというだけのこ 敷がある。何処からか借りて来たのか、誰 と、よくあることだ。また傘の借り物とち の出て来るまで」で、誰のかわからぬ風呂 高須=「ぬしの出るまで」だから「持ち主 さがる。この祝儀が遺手の唯一の収入とい符の一つもいいながらにっこり笑って引き辞の一つもいいながらにっこり笑って引き清=例の通り遺手と三会目の祝儀を詠んだ 藤井 うべきものであった。 遣手の表徳、 通り遣手と三会目の祝儀を詠んだ 金笑とはもっともな事

がって恨みがましいこともない日常の句。

だ」と誰かいうまで使っていようとぬ。だから「ああ、これはウチの

と誰かいうまで使っていようという句だから「ああ、これはウチの風呂 敷

か忘れて行ったのか、それさえシカと判ら

高須

前出

婆の長咄し一分くれろ也」と

同じで類句は沢山ある。

ァ正直金とると笑うなり

18

面白い 何 岡田二同。 丸=受取りを出す代りにお世辞一つ。 恋のおも荷を菓子やの男かつぎ

傍一・20)。すでに二十丁に一句でてきて清=「人化してまんぢうに成る面白さ」(いるが、絵島生島事件を詠んだ句。絵島に 逢うために役者の生島新五郎は、 んで大奥に潜入したという俗説がある。 饅頭に化けて来なよと文が来る に成るは作者も知らぬちへ 蒸籠に忍 安八桜3

高須=「恋の重荷」とは、 重い蒸籠であったろう。 かったろうか。もちろんその重いは「かつ 葉だが、その頃では何かの文句取りではな など類句は多い。菓子やの男にしてみれば 昔男ありけり蒸籠で行 近頃では通り言 宝七・十二・五 天六・九

狂句じみた面白さをねらっていると思われ ぎ」にかかっているのだから、この句少し

岡崎川

饅頭に息杖のいる不届きさ

天五・八

持ちかねる此の男かな」の文句がある。 重荷」に「名もことわりや恋の重荷、げに 恋の重荷」は生島新五郎だが、 をかついでいる饅頭屋である。 謡曲 主格はそ

丸・岡田―諸説のとおり。

杖もって追かけられる初の老

―初老の人、ぼつぼつ足もとがおぼつか

る。住句だと思う。 て追っかけたくなるのである。 よばよばとしてあぶなっかしい、杖を持っ するが、 なつもりである。 なくなっているが、本人は昔どおりに元気 まだ杖などいらぬとはねつけそうであ 周囲の連中からみれば、いかにも そこで杖を持たずに外出 しかし老人

で、その家の人が「あれ、 藤井=-初老で持ちなれない杖を 忘れ たの 傘など大嫌いな小生にはよくわかる。や かけた方が初老が利く。 もしもし」と追 帽子やえりまき

は子供で「おじいさん杖を忘れていたよ」 追いかけて持って来たの

る。

はり私も初老かな。

らぬ。 老とは四十才。四十才ではまだまだ杖はい とでもあろうか。 =「初の老」とは「初老」のこと。 しかし老という言葉からは杖が連想

初

い忘れるのであろう。 丸==まだ杖などのいらぬ元気さだから、 全体に上品ぶったシャレた句である。 される、そこで家人は杖を持たせたがる。 0

岡田二 667 藤井説に賛

泊り客女房ひそん、蚊屋の事 甫

う。 るから、質屋までと考えなくともよいだろ いすぎている。庶民の生活はぎりぎりであ 国。オリンピックも外人客に対して気を使 らなければならないが、あいにく一つしか 藤井=ありそうな句。お客を大切に 主に相談をもちかける。 ない蚊屋である。さてどうしたものかと亭 けらしい客が来る。泊れば蚊屋をつってや 清―せまい長屋に貧乏世帯。そこへ泊りが する

川端二 など考えないで泊めて、別室でよく叱られ なさい」とすすめたら本当に泊ることにな 談しているのであろう。 り、女房が困って亭主を物かげに呼んで相 賛。挨拶として「よかったらお泊 小生もフトンの事 0 丸=高須説の如く駄々をこねている遊客で こねている遊客である。

がねする。 ぬが、冬の客には寒くては悪いと思って気 い。拙宅などは蚊帳はいらぬから夏は困ら 一庶民生活 10 面

である。 前田―「ひそひそ」「蚊屋の事」表現巧み

丸--諸説賛。近頃の東京

(ばかりではな

668 岡田||同 でしょうが)など蚊が少なくなったが、 前はこうしたことがまれでなかった。佳句 以

名代をもふかへらうの番に付ケ

は、敵娼が来ないので、 をさづけ」(46ウ)のところでこの句にふ 高須 目当ての遊女に逢えないならば、帰える気 れたが、「もう帰ろう」と言っているの 帰さないように番をさせるという句である 代に出して「もう帰ろう」という馴染客を 逢うことができない。馴染客にしてみれ になってしまう。そこで妹ぶんの新造を名 ||遊女に馴染客が、他に実客があるため ―前出「どふ云いくろめるかあまっ子 帰る」と駄々を

岡田一同 あって、馴染客ではない。



流転の祝宴

東野大八

2011年1月1日 (私の晩年にとっては、記九月二十五日は、私の晩年にとっては、記九月二十五日は、私の晩年にとっては、記念すべき重要な一日とはなった。田中首相が修すべき重要な一日とはなった。田中首相が終えて久しかった日中復交の天の岩戸のトい絶えて久しかった日中復交の天の岩戸のトい絶えて久しかった日中復交の天の岩戸のトいぞうを開いたからである。

ところで宇宙中継によるその北京空港から、私はかっての日の北京の空を想いうかべら、私はかっての日の北京の空を想いうかべら、私はかっての日の北京の空を想いうかべら、私はかっての日の北京の空を想いうかべら、私はかっての日の北京空港がられていた。そしてそれが、人民大会堂の中華料でいた。そしてそれが、人民大会堂の中華料でいた。そしてもが、人民大会堂での大集会の模様を眼にしなが、人民大会堂での大楽会の様々を思います。

映えて、その派手なゼスチュアがひどく印 しく紅潮した顔が、鮮やかに頭上の照明 懐仁堂のパーティの記者席に坐 演壇で花やかな演説をぶってい 昭和十八年四月であっ である。 黒サー ジの詰襟で、 若 ってい 42 るの 私 は中 は汪兆 た 若 南 燈 K 海

> は の に、時折拍手をおくるのが王克敏華北政務 の が時として鋭く燈にキラメクのである。 が時として鋭く燈にキラメクのである。 が時として鋭く燈にキラメクのである。

明快な歯切 みえるのが彼の持味で、派手なゼスチュアと 六十をわずかに過ぎてい のアクセントさながらにひびいてくる。 の耳には、 てようといった趣旨のものだ。 協力して、 記しようもないが、要は日中両国民よろしく 会の報告である。中味は古いことでモチロ 汪兆銘は広東人である。北京語 よりも、 その力強い広東語がまるで朝鮮語 中国の自由とアジアの解放に役立 れのあざやかなばかりの迫力は、 語り口の た彼だが、 魅惑が場内の拍手 K 十は若く 馴 九 齢は た私

「この感動は訴える中味ではない。演説のをよぶという風にみえた。

汪兆銘は、蔣介石と組んで世に汪・蕗と友人の朝日の岡崎俊夫君も苦笑した。見事な舌さばきの手練にある」

じていた。蔣の抗日政策に対し、一 った人物である。 政権と称され、対中共路線にもラツ腕をふる 陥落によって、国府内に抗日亡国 で、孫文の大アジア主義の後継者をもって任 すること六十七度にもおよんだ。 面抵抗の柔軟政策を掲げ、対日妥協を進 汪はその先頭に立った形。 蔣介石と組んで世に汪・蔣合 国府の行政院長兼外交部長 武漢三鎮 論が 面接涉、 台 頭 0

てハノイから上海に潜入、 府内の二派相剋に割り込んだことから、 である。 蔣と袂別、 を宣明した。かくて親日派と目される汪は、 利はわが手にありと、 梅思平、丁黙村、 を脱れて重慶を脱出した要人には、 がほかならぬ周恩来現総理だったのである。 昭和十三年十二月、武漢は陥ちても最後 中共の毛沢東は持久抗戦を唱えて、 汪とともに、、蔣介石テロ団藍衣社の兇手 このときの中共の対国府接渉の代表 重慶を脱出。CC団の援護によっ 李志群、 南嶽軍事委でその 楮民誼 日本軍に投じたの がいた。 周仏海、 Z 態度 0

胸に迫ってくる。 とには往時と寸分たがわぬイメージで、私

0

梅の一 史の哀歓をまるで象徴するかの もいえた。 のである。 の他の要人たちも、 天壇のみえる北京の刑場天橋で銃殺され、 相次いで獄舎の露と消えてい ともにした周仏海、 ガンのために死去した。 終戦直前、 枝を枕元に飾って…。 華北政務委員会委員長の王克敏 これらは中国歴朝の治乱興亡の歴 汪 精衛は名古 同じ死出 褚民誼などは奸漢として 彼が大好きだった紅 屋 だが、彼と行を の族路についた ったのである。 医 ような末路と 大 0 特別 は、 室で 2

最後の 本軍 生身のドクロともみえた。 鬼にも似た形想は、 む姿をみたことである。 て両腕を側近に抱きかかえられ、 はその現場取材に馳せつけ、 拳銃で狙 からである。 子」(仕方がない)の一語で屈 レツな反発を試みるの 口を前にしてこうであっ 一関の圧力がかかるたびに、 シー 以は一名 の王さん 撃され、 没法子、」 ンも、 終戦直前、 「没法人先生」 危く生命が助 の最後 れに似 黒眼鏡 だが、 そうろうたる中 彼は北京東安市場で の言葉は、 天橋の刑場で のせい 通 顔 彼は とい 例 た姿ではなか 面蒼白となっ 結局は「没法 かったが、私 伏してしまう の癖 か 車に乗り込 初手 かくして 2 が出 まるで た。 0 K モー H

教育総署督籍蘇體仁は、日本でいえば文部大臣のくせに、眼に一丁字もない無学者であたら仕方がない。彼が蒙疆に徳王を訪れ華北から仕方がない。彼が蒙疆に徳王を訪れ華北から仕方がない。彼が蒙疆に徳王を訪れ華北から仕方がない。

ある。 であった。私はその夜の、 として、 スにうつつを抜かした。 大会に臨み、 歓迎宴のテーブルマナーとそっ 産の美酒がすべて出そろってい 宴に加った。山海の珍味佳肴の山で、 0 ゆすって真赤になって喜んだものである。 産に一包みの重い角箱を貫ったとき、 中味は五キロ 徳王の軍令官李俊成から、 私たちは、 政府の 眼をみはるば 迎賓館横の礼堂で盛大な歓迎 10 この もおよぶ生阿片だっ 蘇體仁 政府側接待の麻雀 かりの豪華サー 二行 彼は来蒙 くり た。 の同行記者 同じ風景 角さんの たので 中国特 巨体を の手 Z F.

テーブルは十五卓。卓毎に二組の本象牙牌が用意され、牙牌と同じ二人の美姫が配されていた。絹刺しゅうの紅衣にムチのようにしなう細腰を包んで、繊手がなよなよと艶しくなう細腰を包んで、繊手がなよなよと艶しくなの富久娘で、若い私は正直なところ牌さばきどころではなかったのである。

方で宦官のごとく媚笑した。 ままに… 蘇體仁の秘 先生方、 書官の お気に召 一人が、 せば姑娘 桃源の雲南 そう下卑 たち は た言 御 意 64 0

押し包んでいったのである。

い起して索然となるのである 北京大会堂の祝宴のテレビに、 いまそうし フが若い私たちの間で流行してい 航路」という /急げ幌馬車/ そのころ、 た 節を日中復交の幕明けとい うたかたの夢と 0 歌謡の まざまざと 消え た。 ゆく 私 中 セ IJ

しろ、 たまえ。 事 てい れば哀愁深しの感はいなめない 生代一勝負がすべてではあるまいか。 につづくこの大八もひっくるめて、 東、汪兆銘、 他ならぬのである。始皇にしろ、 せんそれは如何にしろ人間そのものの生身に コマに、すべてを托して哀歓苦楽する。 る。つねに流動してやまぬ時 さがほの白いテレビの映像の彼方に さくらさくらのメロディが流れ、 体、 の夜のこ くつ 至 北京の九月二十五日の新 極人間的なわが身の 張飛にしろ宋江にしろ、下っては毛沢 慨にふけったことである。 私は周角会談に 歴史とはなんだろうとも 0 不逞 蘇體仁一 なる男を天よ、 大きくいえば角さん ~ 一種あ 秋の の流れのその 1 れ のである。 ともあれ慶 夜の、 呉王夫差に 想うの 寛怒をたれ スを見出し と示る 佐渡おけ 人間その 漂い消え 歓楽極 しょ 私一 であ

×

通 信

10000404040404040444

麻 生 葭

乃

田田

と云うことになります

ろいろと身辺の事情もあって止める人も出来なら満点だと思います。その現状維持が出来たら満点だと思います。その現状維持す。おおせの通り雑誌の発行部数は現状維持す。 シンドイ事でございます。 せん、と云って倍加運動も一 ますから、 お略 それを予算に入れなければなりま お忙し いことと拝 時 的でほんとに to

変った編集を考えていられるようでございま でございますが、 読者をあかさないための内容も工夫も あなた様はいつも目さきの 大切

川柳人はただ句を作っておれば、

筆して がない 厚味 誌を買ったものです。その当時中央公論へ執二三の小説を読みたいばかりにその分厚い雑 三掲載されていました。 しているれっきとした人ばかりでした。 また叢書物は残していなくても、いまだに のある雑誌で、 かし私の学生時代にも中 いた小説家は今も叢書物として名を残 ので読んだことはありませんが、このざれていました。私は他の記事に興味 ほとんど政治、 (大正時代 央公論があ の短篇が二 経済を主

> をとっ かしそれには資本が必要です。 物言えば金が要るなり寝るとし

部屋の隅に積んどく事になり勝ちでは、いかに趣味があっても寄贈誌を面の仕事に忙殺されていられる方々 人気は落ちるばかりです。 云って寄贈誌を止めたら益々雑誌の こういう憂き目を見ています。だと ございます。 中略 社会的地位があって各方 寄贈誌は至るところで

うですね。 らずにじっくり考えるよりほかに道がなさそ んな資本がモノを云うことになります。あせ雑誌の内容の質的向上も読者数の膨張もみ と思うのが人情です。 見てほしい、なるべく広い頒布区域がほしい 営者の側に立って見れば一人でも多くの人にだ、私はそう云いたいのですけれど、雑誌経 だ、私はそう云いたいのですけれど、 ることは邪道に足を踏み入れることに それでいいのだ、経営面にタッチす になるの

В

時

十一月五日

(日) 午後一時

締切

二時三〇分

富田林市文化祭

(富柳会)

会

場

東ます兵

富田林西口下車東

和BK右入る

題



大阪天

電(06)943-1111 水 曜 定

信 $\|$

生 河 笑

内

产 む

Ш

好 BB

選 選

5

尾

井 上 吉

席題

題

各二句

2

[11]

摩天郎

選 選

富田林市本町

花岡花梢宛

通

か研究的なもので他誌の追随をゆるさぬよう作家ばかりでした。柳誌は専門誌ですから何私の頭から離れない立派な作品を残している

それこそ鬼の

次 郎

号を殆んど悉く一身に集め、それから最後の わらず、 小十年恍惚の人になって世と絶ち、他人と交 一めて多量且絶倫の傑作著述や学界の名誉記 ギリスのタイラーが長く大学教授をやり ものさえいわぬ年月を生きて長逝し

と、近頃またタイラーの人類学を時々出して にも立たぬ本を読み、文を書くことも出来る か知らない、そんな日を想うて、せっせと役 こんな老境が羨ましいので、来るか来ない

読みます。 (枚方市・文博・追手門学院大学教授・毎日新聞社々友)

47年度同人総会出席者

静水・栞・いさむ・天笑・一二三・小松園 柳宏子・新之助・与呂志・滋雀・酔々・

旅

人 以

後

の

秋・雀踊子・史好・鉄児・徹舟・修史・形水 遊・ 柳志・恒明・古方・鶴声・一三夫・文

正朗・葵水・弘生・摩天郎・牧人・南柳。凡九郎・瓢太・太茂津・薫風・岳人・〆女・ 静歩・恵二朗・生々庵・緑水・悦郎・好郎・ ・之保・万的・春巣・肖二・綾女・多久志・

から本社へ。 祝電―松江の吉岡逓児氏から堀 江 正 朗 倉敷の水粉千翁と岡山の嘉数千代香さん 氏

JII 柳塔社常任理事会 (十月四

同人総会と二賞発表句会を四日後にひかえ H

氏と自安寺会館へ行き、すべての準備OKを 句会幹事の柳宏子氏が会場下検分に幹事数 各項の担当者がきまる。

美しい水彩画入り

方 手 書 き 句

集

送料共 八百円

労をねがうことになる。 って出席者を出迎えるなど、 なお句会当日は幹事が本社の柳旗をも みなさんにご苦

をぬくまがない。 は川柳塔社の当番である。幹事諸氏は当分息

十一月は大阪市の文化祭川柳大会で、

本年

出席一

柳宏子・形水・生々庵・小松園・一三夫諸氏 薫風・柳志・多久志・古方・文秋・

(七時半閉会)

路 郎 作 品品

麻

20

三十六年二月号

不朽洞句帖

この辺のボスで表札出してい ず

ずるずるずると補助罪となり 売春法せせら笑ったつつもたせ

> 女ずき課長にならんじまいなり やくざ稼業大学出した子がにが手

ロマンスグレーみたいと少女におちょくられ 花活けてくれるをモーションだと解

金の要る理事長だけをあてがわれ

非番ですと云うはズボンに下駄をはき 科学より愛に溺れて死なんかな

大阪逓信病院川柳会 低姿勢

姿勢オヤオヤ君も養子だな 南海電鉄川柳会

故なし事故なしで晩酌へ座るなり

(傍

島 静

馬)

同 人 吟

秀 句 鑑 賞

前月号から一

若本多久志

夏座敷魚の額を泳がせる

ずける。 がグッと利いていて、柳歴のキャリアがうな単なるスケッチ句であるのに、中七、下五 いわを

秋の酒恋しがんもどきが煮える

生の句風に似ていて胸を打った。 秋の酒が詩になり歌になるのは、やはり気温 酒その 関係であろう。この句どことなしに路郎先 ものの味は四季変らないのに、よく 史好

嬉しい日閉じた眸に詩が湧く

想であろうが、一層の自重を祈念する。 極み。おそらくこの句は本年路郎賞受賞の感 て、詩の道に打ち込んでいける人生、羨望の ひたすらにかしずく奥さんと共に手をとっ īΕ 朗

大の字に炎えて仏の去り難く 鬼

十月号の川柳塔、近作柳樽には大文字の句

がかなりあったが、中で一番感銘深い句。 外づらの良い苦虫の背を流す

ず、反省をさせられました。 この部類に属する男性で思わず苦笑を禁じ得 たぶんで主人を詠んだ句と思うが、 筆者も 枝

老醜のおなら寂としてたのし

の句に絶讃を惜しまない。 が、それらの発想と似て非なるものをもつこ 老人とおならの句は古川柳にも傑作が多い 緑之助

誰に逢う雀か朝の羽づくろい

れるということは、芸の道にひたすらな精進 こうしたデリケートな心情が男性の句に生 花

留守番に隣の犬を頼りにし

き方を強く批判している句として頂いた。 顔知らぬ隣りの風鈴よく響く し止めが大して疵にならなく、 現代人の生 弘

間性を呼び起さすうたかたの歓びか?。 鍋を磨いてささやかな誇りとし 味気ない都会人の生活の中に、 ほのかな人 あいき

境地にひたれる倖せを祝福したい。 平凡な主婦の生活の中にも、この尊い詩の 智 子

下りエスカレーターに乗ってご満悦そうな エスカレーター暫し襟足楽しまん どんたく

> 作者の顔を思い浮べる時、軽いユー モアが湧

ああ無情値札にゼロが多過ぎる

が無情を感じていないところに面白さがあ 表現に新しい強さを感じることと、この作者 多く詠みふるされ た句想であるが、上五の Ш

早鞆の流れ寿永の哀史聞く 何か叫びたい夕陽が燃えている 味噌汁のにおいが残っていたキッス クラス会ひとりいくさの影とくる 移り香の花と知りても蝶の媚び なお、紙数の都合で割愛した鑑賞句 は 鶴 静 馬 千代

大阪ないしる 色 日まり 紙 もあ セニ・セニュ 用 短 品 册

近作柳樽

秀句鑑賞

前月号から

川村好郎

いつわりを書くペン先が割れている

作者に敬意を表したい。
を者に敬意を表したい。
を者に敬意を表したい。
を者に敬意を表したい。
を者に敬意を表したい。
を者に敬意を表したい。

さもしくも寺の広さへわが家置き

ことを示している句である。 ととを示している句である。 佐々木 静 泉 マイホームの欲しい人にはこんな感じは起 マイホームの欲しいう前書きがあったりやすい。京都への旅という前書きが無くともよくわかる。そし が、この前書きが無くともよくわかる。そし アースの欲しい人にはこんな感じは起 マイホームの欲しい人にはこんな感じは起 マイホームの欲しい人にはこんな感じは起

おそ咲きの雌芯真実の花粉まつ

とみるは失礼か。作者決しておそ咲きではなのであろう。そしてわが身をふり返っての句おそ咲きの雌蕊を見て、あわれさを感じたれる咲きの雌蕊を見て、あわれさを感じたり、谷・葉・子

絡みあい縺れあい朝顔咲いてみせい。誰か真実の花粉を与えてあげて下さい。

間関係もかくありたいものである。 顔を咲かせるという明るい句であり、我々人のである。絡み縺れあいながらもそこから朝のである、縺れあいを連想された句と受取ったの絡み、縺れあいを連想された句と受取ったの格み、縺れあいを連想された句と受取ったの格が、違れない。

まわり道して来た人間の輝きよ

じた。
した。
した。

此の糸の不仕合せなり喪服縫う

「駕に乗る人乗せる人、その又わらじ作る人」という言葉があるが、たとえ喪服縫う糸にしいものである。此の糸の倖せ新婚の晴衣縫しいものである。此の糸の倖せ新婚の晴衣縫しいものである。此の糸の倖せ新婚の晴衣縫が何かを教えている。 小谷 清 女 小谷 清 女

とばっちり貰う日あげる日夫婦です

めにしたところがユーモアがあり、流石だといのだが、この句はむしろこの夫婦ですと止いのだが、この句はむしろこの夫婦ですと止れりに接した。下五の夫婦ですという表現はい句に接した。下五の夫婦ですという表現は

感じた。

ハンダ付けしているどっちも二度の

にして妙。 と五の「ハンダ付けして」とは適切と思う。上五の「ハンダ付けして」とは適切と、すらりと詠んでいて、着想はおもしろいく、すらりと詠んでいて、着想はおもしろいと思う。上五の「ハンダ付けして」とは適切と思う。上五の「ハンダ付けして」とは適切と思う。上五の「ハンダ付けして」とは適切と思う。上五の「ハンダ付けして」とは適切にして妙。

ネクタイが若過ぎるとは妻言わず

で記されています。 であろうし、又妻として少しでも若い夫で嫌であろうし、又妻として少しでも若い夫で様であろうと、又妻として少しでも若い夫で様であろうと、これにだってある。ネクタイが派したところから出た何である。ネクタイが派したところから出た何である。

及 び 特 殊 換物 全般黄銅六角ボールトナット

裢 西出螺子製作所

夜間 № 四 四 ○ 八大阪市天王寺区空堀町八番地

菊

小

粛

選

岡山 県

嘉 数 Ŧ 代 香

夕凪へ個性をおもく置いて秋

吸い込まれそうに老杉の中の女

飛躍するこころ抑えて釜みがく 岩国市 村

思い ひそやかな恋に狂うか黒揚羽

登るしかない坂道のきびしくて 白足袋の汚れたままの妥協案

島根県

堀

II

芳

子

沈みゆく小石へ手を貸す人もなく

空気が風に変る音

一言云いたい

善人が吃る

ひとりではひたりきれない蟬しぐれ 出になるひとこまが多すぎる

奥さんが出て来て金を借りそこね 再会へまた埋れ火の燃え初め

そう伝えますと代理は逃げ帰り

廻りみな生きる激しさ持つ動き 理屈などここらで妻は折れるもの 欲ひとつまた一つずつ生きてゆく 夫よりも一日だけを生きたくて

アドバルーンさえも気ままにならぬ空

大阪市

谷

葉

子

先見の明はねばったねばり得

新宮市 JII

寿で包む草履も秋の色

0

わらかい言葉が頻を撫でてゆき

満ち足りた日々七色の風が抜け

ルビ打って愛の序曲を振りかえる 涙線を止めて明日の美を装う

> Ŀ. 富

子

内

大洲市

暁

風

合

井

西

ペラペラとひとりのレッスンでは喋べれ 生の声逢って良かったのが本音	不安と期待みんなあなたを信じます 野目からの幸せだけを考えよう 竹原市 簑 田	はまで出した水のこうも澄み 仏まで出した水のこうも澄み が原市 脇 本 なりかかるものが今宵は見当らず	野火はげしある日の亡父となる炎 嘘を言うときも鏡を正視する	夢で逢うつもりオーデコロン撒く 欠点は削ってロマンス飾っとき 合い鍵を男に握られている不安 あ ま あ げ
貞	浄	政	不	虎
子	美	己	村石	城
刈られても焼かれても出る草の意地男から搾った金で子が育ち男湯の方へ入ったから男やろ	猫の子をほかしそびれて飼ってますようおこしやすと渋茶の出るくらしいか小びんなり	遠箸対斗	終着駅近いに世帯にぎりしめ終着駅近いに世帯にぎりしめがして時代だ妻もすでたろかでは使えぬ金でもめつづけ	東大阪市 落 合 思 月なごやかな顔の老母の過去を聞く はじ切る事をやめた日のビール

な る か っ が 灯 沙 惜 な 鏡 く が 消 を 来 子 な 言 夢 ら た 近 よ 華 し い だ 手 飛 し で 変 夜 を ま 墓 け づ 僕 罪 み 証 け 折 び て え 夜	ハハママと指って曲った子に育て	? か		自販機へ小銭いきいき落ちていく	貝になって都会の渦の底に生き	適当なイスがなければみな顧問	大阪市 阪 上 十 止 庵	晩年良しというおみくじだけは信じとき	時待てば忘却という贈りもの	母さんともうつながない大きな手	東京都宮崎美津子	鈍行は楽し紅葉の赤字線	片言でもうコマーシャルを覚え	怪獣のような夫で捨てられず	大阪市 堀 口 欣 一	どんな過去あるのか尼僧うら若く	せわしない世に負け行年二十一	オブジェの隙間へききよう突きさされ	氷見市 関 美子	古希までも続くローンで建てた家	まだ月を祭る日本の美しさ	ああ遂に余命の道に来てしまい	
	好きな言葉に恋という文字ひかる	竹原市 生	生きる夢まだ捨てきれず出ししぶり	遠くから墓参する子に育てあげ	たけ飲んで会費		倖せが近づいて来る足は遅く	母の灯よ僕の心の火となるか	曼珠沙華罪を求むる色で咲き		負け惜しみ大きな目玉で睨みつけ	証拠	鏡だけが知ってる娘		美しく手折れぬ花を眺めよう	銃口が飛び出しそうな巡視艇	灯を消してから鈍感に裏が読め		観点を変えて心の棘を抜き	母と来た夜店へ孫を連れて行き	"		ニー・シーク製作のグレージオスニー
笑 一 可 喜 昌 静		信				JII				峠				Ŀ				本				原	
		笑								可				喜				昌				静	

本嫁と花婿ベニヤ板に住み 雑草の花むすられる腹で咲き 名月を歩けば虫ののど自慢 名月を歩けば虫ののど自慢	国宝にされていよいよ無口なり 化粧品ならべ熟練工のように塗り 本尊を売っても生きんとする僧侶 本尊を売っても生きんとする僧侶	り添うてアベ 的添うてアベ	打ち合せすむまで電話のオルゴール 対ち合せすむまで電話のオルゴール 守口市 岸 中田 に 乗り返し に から	人生の最短距離にいる貴方十三の階段天にほど遠し
川	村	瓷	本	置
		原	典	TET.
洋 一	映	仲	<u> </u>	重
々星	輝	美	次	人
ゆえせめて夕陽に燃え 師り街の素顔も見て帰 いたわりひもどく灯 をいたわりひもどく灯	物知りと云われて無駄なコをよじ ち知りと云われて無駄なコをよじ か知りと云われて無駄なコを聞く 島根県 谷	ス手の葉蛙に住宅難はなし の手の葉蛙に住宅難はなし の手の葉蛙に住宅難はなし	雰囲気に吞まれ座席でかしこまり 自分なりに解釈しては腹を立て 本社句会に初出席 本社句会に初出席	神様も美人の肩を持ちたがり流れない川を投書のペン��り
ω.	岡	元の	谷	
みど	芳	柳	清	
=				

お

女

枝 子

共白髪で別居するとは思うていず	蟻の方が暮し上手に立てている	高槻市 山	ご先祖も暑かろ仏壇開け放つ	二男坊にボチボチ期待かけはじめ	り一つ覚	和歌山市 垂	自画像を小さく秋に置いてみる	トワルツ乾いた心	を二部買う遠	1		ルスに風流でない	ンコに	鳥取市 藤	大臣が変り物価が又上がり	万策がつきてお灸に頼り出し	職場見学よいとこだけを見て戻り	鳥取市 藤	親子してイレブンPMポルノ見る	すねかじる奴が利口な口をきき	もの言えば損するような子の無口	鳥取市 藤	
		田				井				杉				本				本				本	
		ス				于								鎮				恵				佳	
		ミ子				寿子				カ				也				子				女	
今治市 渡	笑われた傘が役立つ俄雨	ぬらさない水着が浜を滑歩する	松江市 興	無心する時はオヤジも様が付き	衣食住足りて余生をもて余し	大阪市 松	ゴミ箱は給料もらってからふくれ	孫台風明日いきますと予告くる	寝屋川市 福	大手を振って敬老の日を歩かせる	クーラーを入れて昼寝を友にさせ	河内長野市 森	三菱が甘い夢見て造る武器	尊族も金が仇きの世相なり	八尾市 古	三百六十五分の一の敬老日	父の日を忘れた頃に敬老日	尼崎市 小	公害の背中いっぱいなめ尽くす	身の細る思いも話し秋の月	備前市 武	父ちやんの不在へ指折る日がつづき	
辺						本			富			本			Ш			林			内		
南			富喜			市			隆			黒天			鶴			文			雅		
奉			子			郎			子			子			声			月			1		

る輪のあの顔この顔	新聞に逃げたらCM耳せめる 秋空に一筆啓上ジェット雲	生命をコマ切れにして生きている	上げをするもされるもみな涙	もうこれで限界という夏姿 あくらんだ胸で男女の区別をし		さりげなく一言いって釘をさしかみついたつもりかわされたとも知らず	Ź	砂利トラの騒音私もぼやきたい がちまける相手も無くて猫をけり	村田 ピノイミオ	-	12	ぐ役をけってスタ	海静か二人の歩巾乱れても 秋夜長虫には虫のマイペース
本		田			本	ず	屋		天		原	達	
窓		頂留	ただ		まさひ		万		千		葉	小茶	
花		子	お		3		竿		代		香	坊	
客種もマナーも変り道後の湯上衣だけ着せてマネキン放っとかれ	呼び付けて預金をすれば何か呉れ	ると食堂御入口	儲らぬ宣伝節電呼びかける 畳縫う角度で畳屋腰曲り	を通せは相手に	らけど稼げど運は向い	古着解く糸のきしみにうずくもの	ン玉やっぱり空が高すぎ	暗変えて指かいごしか太くなり	のピアノだんだん知らぬ曲	診察へひろげた胸が恥らう日	議論する時は他人の顔になり 島根県 槻 谷	先手もう読まれているとは気がつかず倖せは親子が素顔に戻るとき	爼のくぼみで作る明日の幸 島根県 東 原
	松	1	E	露		翠		秀		亞			福
	花	Ĵ		芳		月		子		生	葉		子

お百度の石は冷たく知らぬ顔	代っ子送りが	・ 開店日めだま商品売れただけ 服鏡かけたりはずしたり断わる気 足 野		してず	四日市判決もう横着は許されず 日本列島一寸酸素を使い過ぎ 守口市 樋 ロ 一 峯	リエも取り	藁屋根の宿場史蹟で蘇えり 金婚式終えて終着駅近し 須賀川市 平 栗 金 太 郎	・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
和平唱えて北爆まだやめず 鳥取市 藤 本 和 宏	にったり作	- 島根県 岩 田 三 和老いてなお娘心を持ち合わせ- 当落の味がしみこむ酒に酔う	ない男に今日の借りない男に今日の借り	に過去あり	口答えではない弘の意見です。 大和郡山市 森 田 カ ズ エ造成団地公害待ちの草茂る 明日はあす今日一日をヒシと生く	県安 達 潮	4	類なじみになりすぎ名前をききそびれうるさいなと云えばいびきがやむ不思議

お彼岸と盆だけ無精な墓参り	鳥取県 福	軍服の青春だった悔い疼く	羽曳野市 麻	猪番の犬小屋もあり山田守る	兵庫県 高	岩清水足を浸せとすきとおり	宿題にトーテンポール作る孫	大阪市 岡	恋人の命をのんだ山が晴れ	神様はここまで来いと山に住み	大阪市 今	通り雨来ても平気なプールの子	身のこなし過去を秘めてる方らしい	大阪市 広	胸底のゴミは実家へ捨てに行き	電話がついてから筆不精になり	大阪市 本	観る阿呆だけじゃないさとのれん酒	断り方教えて聞き耳じっとたて	鳥取市 佐	誘われても返事は嫁に聞いてから	老二人スリルが欲しいと思う日々	東京都 大	どこ見ても疲れた顔の終電車
	田		野		橋			部			井			畑			間			々		٠	工	
	陽		幽		近			シ			隼			賛			満津			木静			チ	
	Щ		玄		江			ゲ			人			平			子			泉			3	
	度から一コ三百円にさせていただきます。	願っています「暑中広	「お願い一 十月号から印刷書	あかちゃんのペットはとこにきめようか	五歳児の処女作	地 市			気兼無い暮しに孤独がつきまとい		夕やけで猿に似てくるちきれ雲	が	食浴のあても材まる。は同じ	されつとでいるするので可を	菜作り 呼き揃う 日を待せる カヤ	再三)矢を前う日ご存うこぶて 大阪市	地下街の川へストレス銭を投け		お百姓に水洗便所は恐れ入る	大阪市	断絶は老いても子には従わず	大阪市	未練がましく泥坊又もはいり	泉佐野市
	たきょ	P	質が値	8	5	カ		木	1 63	· 71	1	d	ī	木	公	片	}	木	:	須		松		大
	らす。	年賀古	上がり	カカ) (2)	オ		启	j	H	I	里	F	F	司	彪	i de	木	t	浦		岡		工
	1	告」を来年	副費が値上がりしました。			J l t	,	オ	ŝ	似并	Ç	花	Ę.			Jo out		海	j	7		茶々		静
		315	6	1		2.3	J.														į.	坊		子

東

大

今日は仲秋名月だったんだなと気づいたわけるとき、前方の山の端にそれをみつけ、ああるとき、前方の山の端にそれをみつけ、ああい。の山田良行さんとタクシーを走らせていの中でみた。 倉 吉 駅 で 落ち合った 〃きたぐの中でみた。 で今日 る。

姑片

娘足

で出発のころは天気回復。めでたく見学のスケジュールは無事完了。バスは二分して、一台は姫路めざして中国山脈を越える。 一芸朝はやはり湯が一番であったが、私には実済でもその石サカズキの酒はうまかった。 大弓、独歩、炭吉、蝶古と私が、正夫さんの世話で姫路一泊。姫路城をみて帰宅したらの世話で姫路一泊。姫路城をみて帰宅したらの世話で姫路一泊。姫路城をみて帰宅したらの世話で姫路一泊。姫路城をみて帰宅したらがました。恥しくて首でもくくって死にたいちました。恥しくて首でもくくって死にたいながところから一というのがいつまでもた。妙なところから一というのがいつまでもなった。妙なところから一というのがいつまでもなってオワリ。

小川

に馴れニラに馴れ三等車を埋めて玄海灘還える K は 恋 唄 べにする 垂河井村 野

リラン ウ

峠でガイ

in からニ

セ人参が今日

も着

静

観 堂

独葵日步水満

かるナミ水(主 鞍 馬

入れられて、 から大津の打出浜へ舟で渡るのもあった。 最後の宿駅大津に着く。草津の矢橋(やばせ) 琶湖を右にながめながら、瀬田の大橋を渡 その瀬田の夕照も矢橋の帰帆も近江八景に 草津から三里二十四町(一四・四キロ)琵 膳所(ぜぜ)の城下をすぎると、東海道

夕凪に矢橋を渡る三井の鐘 (から)を見て其日矢橋に帰帆也 白峨(九三33 徳 (四四23)

-唐は瀬田唐橋―

七所を見い見い渡る瀬田の橋 大名を百足にしたる瀬田の橋 (武七41

律長(一四37

すぐ近く、膳所本多下総守六万石のお城が 晴嵐に困るは膳所の傘(からかさ)屋 八景の一目に見える御城廓 雨夕(三三19)

五蝶 (五三27

て八景に入れられ、 そのつづきの粟津が原は、 粟津の晴嵐とし

晴嵐にのぼる朝日も雲隠れ 紫式部石山で源氏物語を書く

晴嵐に泥だらけなる放れ馬

南方に見える石山も秋の月が八景の一つで 月よりも筆の冴えたる物語り老芽(九一7) 紫の硯へうつる秋の月 石山でできた書物のやはらかさ 石山をすべった月が膳所へてり(拾二1) 雨夕(三三24)

石山で隈なくつづる物がたり

晴嵐をながめ野分を書きかかり 雨夕(四四29

千之(一五七9)

雨譚(傍二14

木曽義仲栗津が原で戦死

市東 (三五32)

ヤマキ (五三6)

五十四帖を石山の月にかき 文和 (一六一18)

石山で須磨や明石のものあんじ

ある。 もう一つ八景の一に、北方の山に三井寺が -石山寺で紫式部が源氏物語を書いた―

一景は竜宮までも響いてる 如雀(四七9)

八景でてりふりなしは三井の鐘 一「三井の晩鐘」といわれ、その鐘は俵 藤太が竜宮から貰ってきたという 窓梅(二九8)

弁慶のために一景たへるとこ 七景は見て一景は聞て寝る春駒(五六4)

三井寺の鐘きずものの天下一 柳泉(一四九21)

一この鐘を弁慶が引ずっていって坂本の 谷へ投げたのでヒビが入ったという 卜丸 (三八2)

所である。 順礼びっくり石山に生きた雛

巨題(一六一8)

石山寺は西国十三番、三井寺は十四番の札

一これも紫式部—

三井寺も一日は咲く女郎花 七月十五日女詣 (武十五7)

井寺下に一軒だけ「大津絵元祖吃又平」の看 板がかかっている。 つく、明治までは十軒ほどあったが、今は三大津へ入ると、名物大津絵を売る店が目に

大津絵のよく出来たのはうれ残り 大津ではあったら紙を書きよごし (宝十三鶴1)

40

川柳 紋次郎

菊沢小松園

気に 手を振っているのへ気附かぬふり旅なれて泣かぬ男になってくる 関 紋次 気にしないこの世のことは型通り限界を知っているから明日にする 訳 追うて来る火の子 義 0 0 、郎拗ねた女を置 ある人を宿場でやり過ご 欠い 0 ない話 ないこの 7 男の K 世のことは型 は 淚 眼 を払う紋次郎 へ落ち いて発ち をつぶり

0 紋

通

灰 琶を弾いていた。そして、 所で、蟬丸が、そのほとりに庵を結んで、 ならない。逢坂は七九五年まで関所があった などに、種々の色をつかったものである。 大津壁というのは、上塗に粘土、 京都へ入るには、有名な逢坂山を越えねば 蟬 蟬 関一度越えぬ日は無し大津牛 入り手間で一坪余る大津壁 錦重(二三四20) 大津壁雨もりがして藤の花野萩(二三二29) 大津壁見れば京間の上り口 槍持奴、 これやこの行くも帰るも別れては 丸の宮居に近き琵琶の海 丸のよまれた坂に息が切れ 知るも知らぬもあふさかの関 藤娘等の絵が多かった。 カシハ 花菱(一〇〇1) 赤子(一六一9) () (武十四17 漆喰、砺 琵

京の鬼さまを大津で買って来る

醜女をたとえる

大津絵の生きてはたらく軽井沢

23

拾九21

三月は大津絵も来てめしにつき

大津絵は上手か下手か知れぬ也

竹子(五〇3)

(宝十三仁4)

と詠んでのは、百人一首に入れられてある。 銭提て大津を帰る山法師 32

大津絵は粗画で銘

0 ない

のが特色で、

鬼の

錦糸 (一四八11)

大津絵は半道おやま所作武道

つ余って大津絵を内へは

雨夕

(四七34

大津の土佐も弁慶をうまく書 京近い所だが野暮な藤娘

帆布

四 四 14

から道連鬼と福禄寿

梅鳥

19

如雪

二六二11 20 20

> であろう。 延暦寺や三井寺の山法師が町をうろついた ぢれってへのふと大津へまた戻り

礫川 (八八4)

大津からあのおしゃんすをききはじめ

京都

拝見の御庭も大津留り也 外山御殿の五十三次

香貞(六四9)

(拾二1)

所が描かれてある。 のである。 いよいよ五十三番目の大津の宿も通過する 紫へ来る駅路も五十三 広重の絵には、名物源五郎鮒 鹼 (九九18 の酒

あった。東下りの旅人はこの辺の茶店で見送 なるが、出迎えの人とこの辺で落ち合うので り人と留別の酒宴をしたのである。 る。奴茶屋の立場をすぎて日の岡、 大津を出ると左側に伏見街道への追分があ 蹴上げと

す虫 一本橋 深追 秋風 の音 の縺 笠 いは心に染まぬ紋次郎 になって居るのに紋次郎 良区 を聞い 晴 りへ気附かぬふりの紋次郎 0 置湿 5 夜限 れた富士には出会さず 破れから見る流れ星 離せ りの てるふりでやり過ごし して紋次郎 82 0 \$ 次郎 りな 0

はた 5 < う た



還

会 社 員

福

島

鉄

児

会

社

員

古

 \mathbb{H}

水

車

和

服着て夏を涼しいものにする

老眼鏡 命名へ日本一の名を見付け 慰めの言葉もなくて受話器おく 暦は 無事古稀までは持つやろか つで夫婦こと足りる

ある。 云われたことがあった。路郎先生の心使いで何か名目を付けて手当を出してはどうか」と れだけの文化活動をしているのだから、つか路郎先生が来られた時、町長に 一本業かと、妻に責められたものである。 削に住んでいた頃、川柳が本業か、洋服 洋服

マンに転身した。慌しい生活の中ではあるがを告げて、故郷の大阪に舞い戻り、サラリー十八年の永い間つづいた、川柳生活に終り

背水の コップーつに二三人動 靴磨きに靴の 外交のたしなみ競馬 陣定期券を買 つか れをおしえられ 61 など覚え き

謝ることに馴れるもかなし宮仕え

えを経たが終始カバンを提げ、わが人生に悔 ず一と旗組を目ざしたけれどもいろいろな意 語るに過ぎない。 付く名刺も何か空しく色あせて今はむしろ嘲 いはなしと独りよがりで今日まで来た。 味のきびしさにダウンして、二、三度の宮仕 **械屋にとび込んで定年間近かでご多分にも** 笑に似た過去のささやかな歴史の一片をもの 通したことになる。 商業系の学校を出て、どう間違えたの 何しろ職業「会社員」 か機

八問わば職業はこれ会社員

い。のない会社で働き、

いつまでも川柳も作りた

た。長男も結婚して一児の親になった。定年き甲斐である。大阪へ出てから還 暦 も 迎 え の川柳塔の投句が、たった一つの残された生 柳の灯は消えず細々とつづいている。毎月

水 車

-42



特 集 同

風

大空へおはよう夜警日誌閉 地方公務員 ば L 出 てペ す 崎 タ ル 踏 祥 む

月

版企

画

編

集

香

III

酔

K

三度目 しゃんとせと腰を伸 働く意欲勧告に背をむけ 雪豪雪俺は勤 0 勧告蹴 め人 って立ち上り

不思議にも鍵がすらすらあくようになった。 い俺は大門の前で一生懸命、 やませたが、どうしてもあかぬので、 たのしく城を守っている。 お神楽をしてから急にさびしくもなく五年間 の広さをおそるおそる歩い 越えた。大門の鍵をあけるに十日位は頭をな さびしがりやだった俺は巡視するのに公園 城と共に寝、城と共に起き、 たものであった。 お神楽をしたら 六十路 信仰深 の坂

> 霧流れ 蘭学の かもめから白さ奪ってゆく港 阿茶さん ばってん」 島 講 も阿 に 義 は を軒に聞 の訛 蘭 隠 陀 れ さん り聞きたく朱欒買 キリシタン くすずめ も見た花 火 (1

「肥前長崎食いたかもんにゃチャンポン・カステラ・ドウハッセン。お諏訪のボタ餅味 よかろ。そらトウパイニ・そら一口香」浪華 かんな大の字のつく人間は、他へまかしておけという、気楽な人情豊かな遊び好きの庶民の町である。(要するに江戸時代から武氏という、気楽な人情豊かな遊び好きの庶民の町である。しかし上野彦馬・本木昌造など 写真や印刷の庶民文化史に欠くことがない。そうもないことだけは確かである。(統計的確率 い人を生んだ土地柄でもある。(統計的確率 い人を生んだ土地柄でもある。(統計的確率 なんだりまで来たのかという質問には「働くくんだりまで来たのかという質問には「働くくんだりまで来たのかという質問には「働くくんだりまで来たのかという質問には「働くくんだりまで来たのかという質問には「働くくんだりまで来たのかという質問には「働く

はたら う < た



役付 素直 掉い 官服 つぱ が な子育て教育ママの道もたち の白さ眩く眺めてる 胸 に い干してみあぐる小さき幸 ひろが È り深 呼吸 1: 岐

婦

1

ク

子

ŽΤ.

城

修

史

誠実と責任教え子に咲かせ

しています。 はたらくうたって私にあったっけ」と、 止まりあたりを見廻しながら、「ええっと、 来たと云うより走って来たような感じです。 K 余 !!」と呆れ顔をしてました。あれから三十年になる」と云う私に、友は「ヘエー貴女がネ屋上で友と語った青春の一日。「平凡な主婦 屋上で友と語った青春の一日。 飯盛山のみどりにつつまれて、これからも 映える頃、夢多き乙女時代を、 夫と生き、子と歩んだ私の人生は 実に平凡に主婦の道をまっしぐら歩んで もえるような南 の空に、 台湾銀 周 風 木の 平凡 行

> 銅婚 雑踏に暮 せめても 職去る日煙突無心 の半分妻 の労わ にお り妻に買うビタミン に んぶされ 煙吐く

無為徒食靴音ひそと家を出る Ū 思いが一ぱいである。この十幾年健康生活の時代を汗にまみれて生きた妻にはわび切れぬ 環境にいられるのも支えてくれる妻のおかげ の違う話し きる妻こそ真実わが家の青い鳥です。夢多き 大きなとまどいを覚えた。斗病十二年、満足 働けなかった私の駄作ながら川柳を作れる 離職の身が「はたらくうた」を書くことに 妻として、母として逆境に堪え逞しく生 聞 <

句でもさわやかな働くうたを詠えたらと念願 たい。良き先輩に恵まれた川柳の世界に、一日も早く再起して妻の肩の荷を軽くしてやり健康の二字がやけに目にしむ明け暮れ、一 幸せうすき妻へ贈りたい。

夢を何度見たことか。

凡に生きたいと、思って居ます。

切除。

恨みつつ寝てしまう。

そんな心に鞭打って櫛を取る。

美くしくな

なる勝手なものだと思いながら、

こんな時たくましい

15

ながら、出雲の神を



りの今日この頃の私です。 て忘れ去る。全く孤塁の旗を上げたり下した

、る時の倖。その恍惚の瞬間に酔いまたすべて帰られるお客様から造型主のように喜ば

貯るだけ貯 を消 る ま 油 (1 て男勝 金 断 80 0 t す T 卵 りの き が 逃 も げる く生き 仮 な 面 い目つき 「ぬぐ から

灯 叱 美

容

飾

木

村 弥

子.

屋

勤

板

尾

岳

か

נת

る世にきれいに生きて来たを悔い 移り変りの激しさをこの頭では、さばき切れの幾歳月。ついに来た、人手不足、経営難、伴、そしてこの維耳にガイーは、 倖、そしてこの絶頂に次ぐものへ怯えながら全力投球、その生き甲斐をうらやまれる程の健康と若さ、仕事への情熱、女を忘れての

> ヤ 車 ヤ 繼 車 場飲 場 ガ をうまく Ī I + 2 デン隅で小 デン男の意地で大ジョ で帰えれ 1 を預け な だめ た飲み仲 と空いて 瓶酔うて T いる Ľ いる 間 (1 1 עי る ル +

駐 駐 E 怪

仲間酒 になり、 おらず、僕も一生酒に縁がなく、 いもんです。 倖せ者です。でも酒で身体を悪るくする野蠻 でもお声がかかり、 では酒の肴にうるさい一族にされ、どこから 酒問屋につとめ、 に生きて行くつもりが、どう間違 親兄弟、身内を見渡しても酒好 としゃべりながらガヤガヤ飲むのは楽しはあんまり好きではないけど(本当?) 喜んでいいやら、悪るいやらで、今 少々の二日酔いは登山という ばちばち酒の味を知るよう すぐ誘惑に乗ってしまう 受け一と筋 きは ったのか、 るオゾン

柳

塔

社



47年度同人総会

10月8日 自安寺会館

てここで同人句集「私達」の刊行記念句会を をはさんで大阪観光ホテルが見えるが、 安寺会館の4Fと5Fに、 賞発表句会が開催される。裏の道頓堀川 Ŧi. 座の櫓を東 `` きょうの同 こと二ツ井 人総会 かつ 0

III

表がある。 開いたところだ。 会場正面に、 中川 滋雀さんの麗筆で式

は菊沢小松園副理事長ということになっていは若本多久志副理事長。そして「閉会の辞」は中島生々庵主幹。「会計報告と質疑応答」 30 さつ」と「経過報告および本年度事業報告」 一司会と開会」 の辞は西尾栞副主幹。 「あい

りとした口調でのべられたが、各地大会へ幹も断つき)が辛ろうじて総会出席者があればいう盛会だった。あと数名の出席者があればも、おいり、ないである。主幹をいったのである。主幹をいるとした口調でのべられたが、各地大会へ幹がつき)が辛ろうじて総会出席者にわたると の出 快 晴にも恵ぐまれ、役員 田古方氏の 西出一栄氏の句集「ねっくれす」 「手書き句集」 (諸氏 の色紙 の本社発行

67 ます気」を起こさせる。同じことが我々の うの、当用漢字がどうのと言うのではな と並んでいる句は固く感じられるし、「か の組み方ETC、紙面の整理が読者に「読拡げる―見出しの工夫、写真の配置、記事 拡げる―見出しの工夫、写真の配置、 字になったスタイルのことである。 な」、ばかりのは読みづらい。送りがながど 一行の短詩型にも通じる。 字ヅラー 適当に配分して、読み易くしては如何。 編集者達がよく使うの 。漢字がゴテゴテ だがが 新聞を

十周年記念事業にしたいと力強く吉ばれこ。後に本社同人による「自選句集」を二年後の後に本社同人による「自選句集」を二年後の ごとが起こる。 久志副理事長が明快に会計 いものを感じさせる。そんな雰囲気の中で赤い絨緞が敷かれた会場は、何かはればれ店年記念事業にしたいと力強く結ばれた。 かりすぎたり欠損しすぎると社内にモメ 社の躍進ぶりをよろこばれる。 しかし川柳塔社は儲けもなけ 報告をされる。

えないかという質問には、 な意見をのべたあと、各地柳壇の句をすこし広告などの収入のすくないことに対し建設的 久志氏の会計報告をメモされていたか、年賀 ンの御大である、うまいことおっしゃる。をつないでいける」とはさすがに尼崎ニッサれば損もない、だから実にみんなが仲よく手 でも減らせというが、もっと多く出してもら 質疑応答になって、竹原の山内静水氏が多 時計を見ると四時半、 編集担当の不二田 きた。

詣の深い方は別にしても、漢字はを全部かな書きにする主義の方や 11: # 水

活字になった姿も想像して字ヅラを考えてれる…かも知れないのだ。句笺に書くとき る。 見るのも、 て、或は作者よりも飛躍した解釈をしてく 読者はそれに当てはめるべき漢字を想像し ややもすると句意を限定して終う危険があ を囲む懇親宴があるため簡単に説明することには二賞発表句会があるし、その間に正朗氏 漢字に造 漢字で続く処を「かな書き」にすれば ひとつの推敲ではなかろうか。

12 なった。

載料干五百円は本社負担になる。十人の購読グループが二つあれば、その一グループの掲 れど、かりに三千円とすると、四十行以上のから百五行という印刷屋泣かせの編集)そのから百五行という印刷屋泣かせの編集)その一では二十字詰七十五行。(うちは九十一行 いただくため専門的になったが、A5版 かし購読者全員の句はなんとかして発表して 者で誌代は千八百円、これでは維持できない 雑誌というものをご存じない方にも ご賢察を願います。 各グループにお願いしたのである。 聞 ~

夜景に包まれ、華やかな二賞発表の幕あきと (同人出席者名簿はP27 時間もすれば、ネオン満色の 道頓堀

がお答えした。

きのう・きょう

柳 志

セージでした。ない」、ブランない」、ブランの平和の祭典、 である。ということもこの意味からもよく解ンピックは勝つことではない、参加するもの 神事としていたことも考えられますし、オリ 火を太陽から採る点からも、宗教的な一種の 点に返っての発言だったと思います。その聖戦争を避ける意味から始ったのだという、原 代ギリシャの都市国家が対立していた時に、 るような気がします。近代オリンピックが偏 平和の祭典、スポーツの聖火は消されはし りのテロや政治のトラブルでは、 一、ブランデージさんの閉会式でのメッ ンヘンオリンピックは終りましたが いろの問題ときず跡を残したままで、 もともとオリンピックは、古 われわれ

> ことも成程と思います。 クの教会が敢然として、その欠点を指摘し 0 面のみの強調に対してドイツのカトリッ の英雄崇 拝という

人もあるとは思いますが、私は必ずしもそう て以て川柳文芸の進歩とその向上に す。「川柳人相互の交歓と親睦を図り、よっ 出 ているのです。川柳賞をもらう為ではない、年の大会を川柳のオリンピックであると思っ 文化祭川柳大会が開かれますが、 ◇ところでこの十九日には例年 て、一層強くたくましく炎えたぎらせること つづけている川柳の聖火に、更に新しく油を は思いません。三百年伝統の上に赤々と炎え る」ことが大会の目的かのように考えている こそが、川柳オリンピック文化祭川柳大会の 席することに意味があるのだと思っていま 更に新しく薪を差しくべて聖火をし い、私はこの毎年の如く、大阪 寄与す

尼 之 助

席題

(題

及び

選者当日発表)

残っている。 したときから、 数年以前「柳俳無差別論」を眼に通 原則として賛成だと脳裡に

ような考え方になる。 作品が多いこと等を思い合わせると、この 俳諧出の双生児であること、 判別困難な

年余り、まだ峠を越していない、雑然たる しかし、柳俳とも独り立ちしてから三百 新品種とか新党が誕生し

< ばならない。 言葉だが常に強い者が制覇する。 て、私達の目指す真の川柳を力強く押 であろうが、私達の川柳を強く育て上げね は別としても価値あるものなら存在は光る て異変を生ずるかわからない。妥当を欠く 99 柳俳の統制は逆コースであることに気付 ますます多党化、離合集散を繰り返す 勿論ひとりよがりは論外とし 或は数量

> たいものと思っているのです。 や同僚と共に聖火の下に集って、大いに新しです。十九日の大会には、川柳を愛する先輩 い川柳を考え、そして作り、そして語り合い 究極の大目的ではないかと私は思っているの 志

大会へ出てライバルとうまが合い

26 堺市 民川 0 会

日

講演 会場 府立堺労動セット
阪堺線大小路電停下車西へ半丁 府立堺労働セッツルメント 川柳塔社主幹 中島生々庵先生 N

康負者 選選選選

各題三句以内一

(アイウエオ順)

南小好 小松園

長賞、商工会議所会頭賞、教育 文・連協会長賞 各兼、席題優秀句に、市長賞、市会議 委員長賞

金二百円 (呈作品 集)

投句先 堺市九間町東二丁一一七 投句の方は百五十円切手同封 00

投句締切 十一月二十日着限 催 堺市文化団 木 摩天郎

堺市 体連絡協 教育委員会 家 協

子の内気近所素直と言うお

素直さを褒めてご利用しなさっ

貞 悠

泉

面山祐 酔

渡 辺 独 素

直

素直にと出

れば

関白

0

け

Ŀ

1

ヤジャ れるは

素直に育て

たことぐら

歩 選

> 素直さが長所大器は 何事も素直にとらぬ

世

奉

お巡りが来るぞへあどけない素直 里 11 風

逆境にあって

素直

わ

凛として邪気も素直 素直さに悪友達が智

もある

勝

惠

を

0

軒 南

太楼

記びられて私も素直さ欠けてい 年輪も古び素直さか 素直さは膝に重ねた 手 素直な子素直でない子みな我が 靴を脱ぐ背へ素直 今からは素直になろう詫び な妻 H 加 を言う 0 0 カ和英佳保昌ズエ宏詩女夫道

素直さえてこから先は問い 齢の功素直に 嫁ぐ娘の素直が母の 結論は素直になれとさとさ 肩よせて素直な母娘が露路に住み F 詰 れ めず 局 泉 月 水 替

バな話

振 62

0

何

て

日

る

素身郎

返

< 返

3

本蔭棒

事

Щ

生

不

7 た

嫁し づいて家風に 両手つく 直 潮

花

見 素

る

緑

水

7

どんたく

朗

直

君が代も素直に聞ける子等が居て 反骨もあって素直が生きて く 言うだけは言うて 素直な耳を持ち 3 本蔭棒 干

翁

落し穴あるとはいえず通

世

田舎バスのんびり牛が通

ぼ

せんば路地は夕闇もう来

ぬ怒りのピケを

素直さを欠いて心に 親の株あげて素直な 明かるさは素直な嫁が持 素直さがなくて盆栽 素直さが追い追い抜ける共 負けん気の割に素直さ見せてくれ 貧を知る子の素直さがいとしく 素直な子その素直さに親を 惚れてよし明るい顔は気も 生来素直にして出世に遠く 聞き役の素直にオー 盲愛が素直さ欠けた 給料日だけは素直な 恋をした頃は素直に 違ってても遠慮もなしに 環境の良さが素直な

あ 子

3

迷

5

2 って来た

ば

れ

峰

き

伶 弘

> III 柳 塔柳箋

也汀

送一料冊 七〇円円

2 ぼ

高 木 桃 里 選

まわり 弥次馬 鍵 汗流し急ぐ工 通せんばガキ大将が 民族を二つに割って ベトナムに通じる道だ通 縄とびが買物 赤旗を振 ボーナス日服 革新のピケに輸送車 転車に っ子 0 道したのにここも工 へ火事場は縄で通せ の縄飛びに逢い煙草 いって工事 かかわりのない 屋飲み屋の通せん 7 7 はば を通 音 通 通 난 世 頭 世 ま N h h 2 事 12 n ぼ 0 ほぼ 中ほ ほ ほ ぼ 緑輝洋奇綾宵春本三思宵隆貞陽 水親々童女明日棒四月明子祐山 どんたく

課

せんば頭

を撫

ぜて

か

3

通

0

于

ロレスの

力も欲し 63

恋を

知

3

静

泉

月

天

通

せんば結局法

0 名

0

解

か

n

通せんば消毒

薬

0

臭

63

+

軸

通 あどけない 腕章が通行禁 取り巻きが下意上達を通 税関が待ったをかけた通せ 通せんぼしたのは小さい 本年も通行禁 泣くまでは通してく 立札が通せんばする ここからは私道と棚 感情のもつれか解けぬ通せ 通せんぼイデオロギー 議論だけさせて与党の通 せんばもう影法師 せんばの歌に浮 門の仁王が邪心を П の切符で ンの おやつへ散な通 小銭をね 通らぬもよし 通 ıĿ. 止 3 0 かんで来る故郷 が主張 、れぬ通 だる通 通 子 ま 長 札 通 ・を見 世 < 小さい ま 七 世 通 せんぼ せんば せん な N 0 ほ ぼ ほ 橋 れば 3 蛇 は ほ ば 七面山 軒太楼 金太郎 里 千 鬼 和 扇利度 旭 暁 可三

> プ 口 ス

替

耐え抜いた前座王者の夢を

抱

いは嫌いでプロレ

スだけは好

き き

古洋

竹 内 圭 Ξ

選

素身郎 水 翁 風 翁 焼 宏 水美 水 1.1 童 7 7 プ 返事ない筈よプロレ 7 ルー I 花束を投げて殺気を呼ぶり プ 7 反則も種切れミスター珍の 兄弟でプロレス好く子好かない 悪役のあだながまいプロ プロレスとドラマ夕餉がす いいが好きと達者なおじいちゃん 豆レスター皆ジャイアント馬場ばかり ライ だくでプロレスを嘘かばい合 ロレスを見たを水銀柱が ャンケンに負けプロレ ロレスの手を伯父さんで ロレスが好き病弱 ロレスのような肥満児母 ロレスの好きな娘 書きの通り最後は馬場が レスで父と子意見 ルなど知らずプロレ スの スの記事を読んでもサン 仕事やな母のプロ 不死身を妻はふしぎょう な 致 緣 ス面 夫 スが明になり L グラス スラ れちゃい ためしてみ 寸 戦 U. が 案 遠 勝 3 居 中 ち ガ 子 63 利 木 重 伶 3 悠 宵 素身郎 どんたく 章 春 旭 英 度 扇 佳 智 美魚人人 亭 雅 詩 H 泉 童 明 明 水 女 プ ブ 八百長でよいプロレスがある余生

白黒で良しプロレスを一人 プロレスの好きな夫婦で気どらな プロレスの時間明治がひとり占 バリバリと兄哥ちゃんこことにかえ 案外なお人がプロレ プロレスはショーではなと信じ切り 商魂もちらりプロレス椅子がとび そら頭突をたテレビへけしかける プロレスが好きなお人で罪がない スファンやった 85 新少 扇 古和梁 水男月水句助方宏水心々

ブ V プ プ ロレ ロレ ロレスに目がなしまとい父でい フリー ロレスをま気の毒で祖母が見る ロレスが好きという娘にな不安 スが好きな女房で元気過ぎ スが好きで二人の馬が合い の今の三つは速す ぎ 可 カ ズ 住 エ 七面 杜 本蔭棒 14

尾

笛 送料共

六五〇円

武器輸送させてはならぬいを張り

49

底抜けた阿波徳島

(どん底で抜け道探す日

のあ

どん底

知 せり 3

題

底

 \mathbb{H} 恵

本

朗

う。 (思い出は谷底道のわらべ唄) う。そこでこの句の場合、かなーを捨てて次まり現代では用いない 叙法と言って よかろ 法はすでに過去のものとなってしまった。つ が、初歩教室の特徴かもしれないが、この叙 かな一を用いた句をちょいちょい見かける 出は谷底道のわらべかな 底の小径 0

どん底のくらしに楽しみの歌があり ゴキブリ 底寒むの暁闇 どん底に希望湧かせる子の笑顔 どん栗を慰めている池の底 底抜けに明るいよでは底がない 強いこと言っても底は知れたもの うま過ぎる話もやがて底を見え (どん栗の孤独知ってる池の底) (底抜けに明るい男に底がない (強いこと言ってる底が見えてい (底辺に花あり歌があるくらし) (ゴキブリの斗争暗の底動く) (樹氷の精 (他の底そっとどん栗抱いてやり の斗争の世がある夜の底 阿波の徳島底抜け 所舞う時間 に樹 氷の精 閣 の底冷える 極まる 3 3 京 寬 同露 誓 頼 静 子 杖 次 泉

逆境も笑って通る底力 底辺に住む子らあわれ雑草の如 底冷えの年は年なりようこたえ 底ついた財布を知らず孫ねだり (逆境を笑顔で抜けた底 (底ついた財布と知らず孫ねだる) 底冷えにあんたも年ですなと言 過疎も底つく二軒だけ 根強よさ底辺の子らに見る) しわれ 志 0

竿

これは好ましい叙法ではない。し止めとなっ座五をし一で止めるのをし止めの句と言う。

の底から惚れましたと酒の上、底知れぬ女の意地に押され気味)

四

ついた過

疎の分校雨が

の男心の底はわからない

4:

14

津

ね

た惚れたと酒が言う

再考し

てみるべきであろう。

底知れぬ女の意地に降参し

尚参考句として次の如く替えてみた。

(谷底の道ふるさとに似てうれし) (谷底の径に郷愁そそられる)

> 貞 祐 どん底のおかげ苦労の花が咲き 論戦で底の浅さを見破られ どん底にあって笑顔をたやさない 海底は海女がお金になるところ (どん底の諦観か笑顔たやさない (どん底で苦労の花が咲きそめる)

ダムの底鎮守の森がゆれ動き底のない噂へ秋の風よ吹け あげ底にこっそり敵は本能寺 底辺でいやというほど知る人情 (ダムの底鎮守の森が哭きゆれる) 、正論に底の浅さを見透かされ)

(底辺で知った人情抱きしめる まさひろ

老人は底知れぬさびしさに耐えどん底に生きてて虹を忘れない あの人の底を割っても見たい宵 鍋底を叩いて踊る無礼講 底辺を抜け金メダル両掌に満つ 底のない蚊張に底からもぐり込み 物価高底辺あたりをウロ (金メダル底辺時代を知っている) 知れぬさびしさに耐え老いて チ H D L 3 ますゑ 人 静 同陽 静 観 水

ずば抜けたお人好しだが底はあり 悪の道底なし沼とおなじこと (底辺の子らよく太りよく遊び のくらしも子供よく太り

米櫃の底を叩いて粥をたく (米櫃の底を叩いた頃おもう) (底なしの沼に一とすじ悪の道)

同シ 隼 ゲ

茶句坊 保 夫

美

度

同茂

どん底の苦労が今日を生み明日を生み 豐生 山子

堂

夜遊びの口実もはや底をつき をば一という叙法は古くさいよ。 お互に腹の底をばさぐり合い 逆立ちをしても底値は動かせ (日本の底力田口君が見) (動かせぬ底値が算盤投げ出させ) の底さぐり合ってる儲け口 一辺が値上げブームにゆれている)

秀 進 繁 村 子 米櫃の底に住みつく貧乏神 どん底の生活に根性鍛えられ 底抜けのお人好しだなだませない 底辺にいてもプライド忘れな 底抜けの阿呆も寛美のお家芸

底の底まで見抜いても知らぬ顔 底の底見透かしている苦労人 前さまの口実どうやら底をつき

底をつく下手な話が時を食い

藤

底引き網赤銅色の声そろう

人気が出て驕る波にも底があり

根一十

一月二十日締切

(一月号発表)

岡山県倉敷市下津井三五二十七

ダムの底わが古里の波紋見る 樽底を叩いて島の灯

カズエ

ハがゆ

れる

翁

本蔭棒 童

杜同慶

底なしの沼さざ波もたてず澄み

比呂

の落着いた司会によって大会の幕竹の子であった好青年小島蘭幸君竹の子であった好青年小島蘭幸君 30 聞き及び、その心くばりに感心す よう留意されたことを静水氏より みで壇上におけるざわめきを除く 脇取をする簑田浄美嬢一人いるの 会と違った感じを受ける。それは 次々と進み、 開かれる。 ふと各地における大 各選者による披講が

川柳大会が催されて今年で第十 て川柳大会が開かれた。

を数え、出席者百七十名の参

九月三日

陽の小京都竹原

この近 K 近

県川柳大会に

案じて無理に出席を中止させる経 家に獲られ無事大会の幕を閉じる 身体の調子が悪くなり周囲の者が を楽しみにしていたところ、 この大会には生々庵主幹も出席 賞は大半、 熱心な呉番の優秀作 急に

はまだその火の燃え盛るを見る。

会場に当てられた竹原福祉会館 畳の香も新しく正面に立派な

幹来るの報が伝るや、

川柳

が代読する次第となる。生々庵主緯等あり、主幹の祝辞原稿を小生

数少くなったが静水会長の情熱

竹の子の別名で有名なこの大会

丸刈、セーラー服姿は一時よ

であった。 が多忙をおして参集。予定時間を たことは今後における大きな収獲 超える対話ができ、 会に十数名のたけはら同人の方々 大会前夜、 敏感度の深さを知らされる。 裏話を聞き、 5 の組替等嬉しい忙しさに追れた にその記事を載 磯辺旅館における懇親 本社の動きに対する 交歓を得られ せるべく印 また

(本社関係出席者 葵水、岳人、鬼遊) 小松園、

が毎年それに近い川柳人を集めらにおいて二百名を越す時もあった れることは仲々大変な事である。

一る苦労の積み重ねである。過去

たけはら川柳会同人の十五年に 者があったことは静水会長を初

85

原点は何と馬鹿々々しい神話 ▼広島平和祭川柳大会特選 秋山 清紫

この 合掌の指原点を知っている 山川阿茶女史が去る日ミナミの 愛を原点としてケーキ切る 河内さい 三寿枝 子

良い安い

月賦百貨店

買いよい 尾

店 店 阿倍野店

店 店 店 店 店 店 crcdit system

住

吉

大阪市阿倍野筋3-

本社 -15-1TEL 632 -38063807

営業所

あるお寺で見知らぬ老婦人から声をかけられた。「もしや、須崎豆なんの告別式に見えた方ではお秋さんの告別式に見えた方ではお秋さんの告別式に見えた方ではおりまた。「もしや、須崎豆なれたことがわかった。

51

大 萬

入選発表

投句総数 者

七五 十 十 一五 句句郎

雑草の執念初心こころとし 大阪 栄

どん底になお耐え初心の灯消さず

初心なお腰の低さが煙たがれ

人気の渦初心を抱きしめる

芸道は嶮し初心崩れかけ

人生の仕切り直しに要る初心 富田林 弥栄子 平田田 代仕男

人の花赤く初心にある迷い 句抜けて初心の孤独救われる 神 戸 どんたく 神戸牧

当選の朝の初心を忘れまい

一からを出直す朝を妻と出る 大阪 修史

栄転の初心に戻る低い腰 な茂津 下積みへ初心にかえれと無理なこと

数珠つねにかくしに入れてき初心 大阪緑 尾酔々

水

初心など忘れて赤い旗を振り

後輩の初心に学ぶ今日の僕

教え子の初心忘れず来る便り

現実の壁に初心が突き当り

初心にはそむき肩書欲しくなり

本木

はじめてにしては初心へあたたな

初心まだ捨てず都会の隅に生き

初心の句繰れば十年ののろい足

倉 敷 八笑人

ベテランが初心にかえる日の決意

笑

子

Н

転業へ再起初心にゆさぶられ あきらめて初心に戻る二次職場 八尾 郎 夫

初心貫徹時には妻に励まされ何もかも初心の域という多趣味

噂など平気初心を崩すまい ハンドルへ初心を抱いてきた無事故 島根芳 大阪 英 雀 詩

初心忘るなと叱る恩師の声がする 古日記初心に遠い僕を責め 岡山白 倉敷里 風

初心者へ指導初心の日を憶う

倉敷

水

初心者も歓迎安く使うビラ 耳打ちも微笑も初心動かせず ひろ子

初心なお忘れぬままに平社員 マンネリを初心にかえす日の素直 大阪之 藤井寺 吸 保 江

幸福になれて初心へすきま風 ものおじをしない初心にある強味 純愛の初心忘れた倦怠期

初心からやる気の老夫に職場無く東京に染って初心向きを変え 馬

左遷地で初心にかえる堅い椅子 再会のビールで初心固めあい おだてにも乗せられ初心夢多し きれぎれの夢を育てている初心

遠大な夢は初心を連れている 火の中で学んだ初心忘るまい

好

枝

里

妻や子が笑う初心を持ちつづけ 初心には遠い稼業で儲けてる 兵庫可住

就職の初心を母が温める を輩に初心ひやかされ励まされ なんが出来て初心がほっとかれ 大阪

初一念はたせば神様もう忘れがむしゃらに稼ぐも初心忘れまじがむしゃらに稼ぐも初心忘れまじ

生

平凡に生きる初心へ逆戻り初心通りいかぬ人情の裏表少年の初心へ懸ける虹の橋

花

初心一筋暗い心の日もあった

初心者というては居れぬ人不足

兼講所時 題演

八

市文化 月十二日

祭

JII

柳

大

0

Œ

午開場

締切

時

投句締切 島

費題

挑祈襟本竹伝紫

八尾市商工会議所 田田堀中 (近鉄八尾駅より六分) 東洋 桂 塊生 秀 宜 太楼 人庵 樹介

賞

也

戦り

つ音

順

投 句 先

大に各題別記

住所、

氏名

記入

各題

三句以内

第五

П

奇

術

発

表

会

います)用紙は葉書または葉書

氏氏氏氏氏氏氏氏氏氏

5 8 1 会長賞他 八尾市長賞・ 教育センター 一内 公民館川柳係 議長賞・教育委員

主催 八尾市菜の花句会

主

催

関

西奇術教室

初心忘れず重ね 鼻がつかえて初心に戻れない 初心者をやっと仕込んで引抜かれ 故郷捨てた初 か初心 果て初心 根性 佳 撫でたり が心を思う飯場雨 神 酔 拳 に還り着く 0 句 中に秘 句 倉 鞭 笠 L 敷 阪 岡 たり 80 里 貞 桃 童 子 祐 里 夢 初 初心者の 九八七六五四 か 念おとこを父の中にみる 和四十七年度 なり旅路初心にまた還 天修水花酔克弥吸里 ベストテン 汗は素顔に光ってる 笑史客梢夢枝生江風

八〇

倉

0

東大阪 藤井寺

倉

敷

Q Q 0

阪

 π \mathcal{H} (九月現在)

0

七六五四

十二月二十

0 Ŧī. Ŧi

富田林

--

Ê

敷

初心者

惨敗

煩悩の

富田林 弥栄子

る勇

アみ足

四

阪

人助好児馬

九九九九

 π $\pm i$ \mathcal{F}_{L}

五

新之

四 四 五 七、

五 Ŧi 0

否

ЛІ

四

富田林

句

当日 題

100円 の都合によりなるべくご投句願 (当日も受付いたし (呈句 発表 報 ますが選

5 き 昭和四· 時開演 + 七年 月十二日 日

ところ 大阪市南区長堀橋筋一 福徳相互銀行本店八階ホ T 1 H

12

来場飲 迎 根 康 昭 和 四十七年 度 最 終

以下

略

句

阪

客

梁太茂津子

和歌山

=-,

倉

阪 敷

昭 二回 和 あと味」 「一回」 五句以内和四十八年度第一回 五句 十一月二十 以内

H

投句先 便番号五四二 南 区鰻谷

大阪市 川柳塔社内 仲之町二〇

町一の三の一が変ります。 萬川柳係 一の三の七。藤井一二三方「大変ります。〒593堺市堀上緑(四十八年度第一回分から投句先 十八年度第一 電0722.78 分から投句 大萬川 柳

係

53

6688)

▼中島生々庵主幹は九月二十八日に郷里佐賀県へ墓参 ・ へ出席、旧交を 温 められている三八会の同窓会 されている三八会の同窓会 されている三八会の同窓会 されている三八会の同窓会 た。(カットの写真はその た。である) ▼一宮市芸術祭協賛川柳大会十一月二十六日午後一 会十一月二十六日午後一 長額、「野蛮より徒歩十分。兼 版、信頼より徒歩十分。兼 版、信頼より徒歩十分。兼 である、描 し、コニホーム、春三句、 く、ユニホーム、春三句、 く、ユニホーム、東 の五、一宮川柳社宛。 四五、一宮川柳社宛。 四五、一宮川柳社宛。

三句。投入国、担保の大会を表して、大国、担保の大会を表した。

柳 有 信 望

新之助

, 界展望十二枚を執筆さ 対している。 最近の北海道 野大八氏 (美濃 加 茂 は # 俳句研究》の年鑑 がは活気を呈している。 は # 俳句研究》の年鑑 がはる。最近の北海道 は # 俳句研究》の年鑑 が、毎

B 5 一九の五京 の五九の五京 の五九の五京 信 信条三

入い氏柳八十

第二回島根県川柳大会は ・一月十二日(日)正午か ・出雲市駅前通り黒崎旅館 ・出雲市駅前通り黒崎旅館 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社 ・出雲市教育委員会、社

通巻第二五三号) 通巻第二五三号) 通巻第二五三号) は、第十四回出来 はこだて(鈴木青郷 はこだて(鈴木青郷 はこだて(鈴木青郷 は、第十四回北青柳 は、第十四回北海 が直至では創立者

てと。

▼隠岐不酔氏(▼若柳潮花氏 十二月切りで短 十二月切りで短 れ、水客、紫柔

取良の年にされ が大合格、長女 が大合格、長女 が大合格、長女 が大きなど、こと は、長男の成人 は、長男の成人

も理陰▼出事川尼 来長柳緑 同 去氏 のご多忙とのでの単備を 句雜逝番 。 (木耳)

金へ見え、行年 は

区は 上と交月 ▼堀江正朗氏 ・ 選勝、路郎賞、 ・ では、 ・ 三夫氏の二女檀 三夫氏の二女檀 「一大大」ので対るくする軍 「一大きく報」、「一大きく報」、「一人」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」とどもらが明 「一」という。

十全国 日鉄 加ら加い 台連 地盟

- 54

たのしみだとの 系香両氏らと好 に踊りをやめら は、(高槻市)は は、(応路市)は書

新 同 人 紹 介 神 西 岩 塩 玉 古 一三夫・与呂志推 4: H # 詈 Ш k 巣· 舟 虚 春 与呂志推 . 秀 油 本 重 鶴 栞 単 蓝 推 推 肱 峰 人 棒 應 声 應 施

自二。—層雲峡それぞ が内の新童氏(倉敷市)も 行大 が内の新童氏(倉敷市)も 行大 が内の新童氏(倉敷市)も 行大 を結婚十周年記念に北海道 へ。―北海道の広さを知っ た汽車の旅。 を対田瓢太氏(守口市)が 主宰する関西奇術教室が こら 五回奇術発表会を十一日 二日一時から大阪市南区長 堀橋筋一丁目の福徳相互銀 「不場所、 「不場所、 「不場所、 「不場所、 「大場所、 「大場所

天大♥ 島の♥ うけばられる。 へ一般長江入れる。 へ一般長がかりません。 である。

K イドつとめる 船で鳥羽方面 は (如

て石は

石柱仰ぎ目がくらは空路北海道へ――二、綾女夫妻(東

▼吉岡逓児氏() ▼大江秋月氏(F ・大江秋月氏(F ・大江秋月氏(F ・大江秋月氏(F ・大江秋月氏(F ・大江秋月氏(F

十勤統公

OIL 表彰

店の受けている。美代さんの日となり、美代さんの近代的店。美代さんの近代的店が野判。柳友がぞらなり、美代さんの近代的

●市場没食子 、

薫風、喜

が九月二

・現実・異・一日(火)

目落題二

堺・ 若芽合同句会

会場は近鉄永和駅前市 散る時 . ピカニーは十

カ。会易は丘狭み ・気長・転業・数 ・気を表する。 会場は松崎町二丁号 (火) 午後六時 - 〒 阪川柳会 - 十一月 -

月

and it was を Ringo 金露酒造株式会

十一日(火) ・縁起。会場は ・縁起。会場は ・縁起。会場は ・縁起。会場は ・縁起。会場は ・縁起。会場は Aは・誤発売・ 会場は南海電・ 「点後六 省無時 邪 会場 気題は 鉄ル十 11

は堺・

本秘六

55

JII

10月8日 自安寺会館

表句会が夢 という環境 をいう環境 をかり ては 2 £ 4 F で川柳塔社47年度の一歩出ると道頓堀 い、惜しむらくは ないが、これが、これになっていう不便 大域 公さで・ の繁華街 小的 四亿 は名 賞 申室も

り、スター れた。奇-うに消えることなく柳界に まず生 ターとなった受賞者がジ ターとなった受賞者がジャコビニの
東境の中で川柳塔社47年度の二賞
環境の中で川柳塔社47年度の二賞
環境の中で川柳塔社47年度の二賞
電台とも当夜はジャコビニ流星雨が
まつくも当夜はジャコビニ流星雨が
ないまから受賞者がジャコビニの
ないます。 63 0 までも 輝いてこれである。

友電主幹から路郎賞を受け、 方雷の拍手を浴びて島根の ほしいと結ばれた。 芳枝さんの 欠席で正 朗氏の堀江 の愛嬢 柳塔生 初子

た傍島静思なんが代ける 来のご出席 恵二朗氏 島静馬氏が、句会出席NO・1として表会出席連続二十年という大金字塔をたて って受けられ 席だった。月間賞杯は本多柳志氏氏(倉敷市)静水氏(竹原市)が る。 の遠

三夫・雀踊子・ 熱気をはらんだ句会も 新之助 . • 醉

Щ 内静

鈴溪峯こ 鈴虫を 探して 谷 の ふちを 這 い溪谷美も入れてホテルは売り出され スの 百 合 との 谷の 底が わが 家の 水の 碧 鶴摩野新 天迷 声郎路助

とう とうぬいだ

4

英谷 美 遊覧 バス は 徐 行 す 人工 の 美で なし 谷 は 秋 の 人生の 谷間 陽の 照る 時も あ 谷あいの 姫ゆり 手招き する か 水もなく 月の 谷間は 冷えてい だル の 谷間で 粗い 夕陽 に 偲 ビルの 谷 つむじ曲りの 風が ゆ 谷虚の ワラ屋根 見下すハイウー を配の ワラ屋根 見下すハイウー なんの で つむじ曲りの 風が ゆ 谷底の ワラ屋根 見下すハイウー を正の で かし の 風が ゆ 谷底の ワラ屋根 見下すハイウー を正の で かし の 風が ゆ 谷底の ワラ屋根 見下すハイウー を正の で かし の 風が ゆ 谷底の ワラ屋根 見下すハイウー 立てこまで 来ると 対 を成 の 行場 へ がの靴みがきビルの がの靴みがきビルの 谷 のぞ き 心 の 一方 通行 ビルの 一方 通行 ビルの 本の ない 谷だ. クレーン車はとどろくダムとな谷間 ホー の 谷間に 敗者の 靴みがきビルの谷間にらいない める 紅葉 を 縫うて 九十九折 0 ワラ屋根 見下すハイウェイ谷 つむじ曲りの 風が 吹き ない 谷だから 出行 ビルの 谷間も 行場へつづく裸 が谷の 間やっぱり 冷たい 鼓動 底まで ャンプは 河内に 谷が 照る時もあ 日 さぐり あ 0 落ちてくる ひとり 秋のかたむ 日 あ 行こう 地む標谷 の灯 ある い如し 0 す 偶う あ 0 色 3 Š 旅順り 0 幸夢い与弥悦恒肖花一弥恒春正 太 さ呂 郎成む志生郎明二梢夫生明巣朗 柳宏子 葛葉宣万古肖静万万 城子介的方二馬的的

お堀ばたどっちを 見ご 何よりも まず 外堀 さ 堀の 水 日 本 歴史を 堀の 恋 も 映 ... つり堀の 堀端で今夜も 10 月 立 知争い場と まで して も等は 歴史を を る 埋めても 絵となる 0 見て 話 よく を 埋底た 5 2 0 堀影法師なる策 の水師が水がある策 に堀か見て戻 水 れに 0 0 す 0 柳宏子佑 智庸弥春柳 子佑生巢信



堀畑の面の命し

古城の

を 愛か 愛かさは 語にを母

は

ね

かえす

てりる静

す鯉

を t 0

魚

堀の

古局 けられ

芻の語埋庁亡

りめつ史

は

0 面が水 断

堀

0

か 結

> に興 横たわ

世代と言う落城の哀

の哀

史を

残す

堀

0

3

言 問

見えない堀が

正川 朗氏 塔社四七年度の (島根県 路郎賞を受けた堀江

> 堀遠のい 道頓堀 幅あり乗るところまで来たたり 日 0 の名所の 埋められ 日鮒 疵 たけったになっ 0 の風 あとが 閉して 0 3 ・ビンの 堀のメタンガス お \$ 63 色 女 あき 鏡 波 あ 44 化粧 3 3 た道頓 しくなり らめ 生 0 85 ㅎ 3 恋 き 3 堀 よ 0 雀宣柳緑修正葛凡好宣三史 踊 子介志水史朗城郎郎介郎好 維太万酔緑古文夢好牧形柳一 栞久茂 子津的々水方秋成一人水志夫

> > 永題

杯

南汉小松園

街

古本多久

会のこと

やめの

花散り そうな

蒸沢小松園

感激の 乾杯 イブニングへ こぼ し乾杯で 済まぬ 野心 炎え つ づ け乾杯に むせんでいるのは 主賓だけ乾杯に むせんでいるのは 主賓だけ乾杯に 新婦の グラス ゆれて いる乾杯の 音頭 で 顔を 立てて おく でれて 音気で が 脱 げず がない きゅう アラス かれて いる は 大き が 脱 げず とり かんしょう しょう しょう かんしょう かんしょう しょう しょう かんしょう しょう はんしょう かんしょう かんしょう はんしょう はんしょう かんしょう はんしょう かんしょう かんしょう はんしょう かんしょう かんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう かんしょう はんしょう はんしょう かんしょう はんしょう かんしょう かんしょう はんしょう かんしょう しょう かんしょう はんしょう かんしょう しょう しょう はんしょう かんしょう はんしょう はんしょく はんしん はんしんしょく はんしょく はんしん はんしん はんしん はんしん はんしんしんしん はんしんしん はんしん はんしん はんしん はんしんしん はんしん はんしんしんしん はんしん は 乾杯の グラス 乾杯の グラス グラス 17 乾杯 庭で 虫も に孤独 禁酒 謝の から ぎりしめ もらい 落杯 鳴く かい 握 it 可酔天 あ柳明可与三牧緑一好祥百一藤 い宏陽 動々笑き子軒動志郎人水三一月酒栄持

さん。 川柳塔賞谷岡芳枝氏にかわって賞を受ける堀江初子

村好郎

表人ホームで 乾杯しました 敬老人ホームで 乾杯しました 敬老人ホームで 乾杯しました 敬かんぺいと 叫ぶ 北京の 宴 は 乾杯 が 済めば 市長 は 席を乾杯に のこる 小異が ほろ に乾杯に のこる 小異が ほろ に な 不 へ 晴 着 の 袖 が 重た乾杯に のこる 小異が ほろ に ながは一致あとの妥協をどう埋乾杯に のこる 小異が ほろ に る せんかんぺいと 叫ぶ 北京の 窓 が 天高し 乾杯 だけの 電杯 だけの 街 今日 かとに ッシュへ カメラを 意識 女史の 見事な 音 頭 僣越 そ で ** ないと し 乾杯 ぐっと し 乾杯 だに よ カメラを た今日 スリ マンの裏に住む かん また会えそうな 夢 まりお 度 通手的で は遠 は茶碗の 0 持連 場たが う飲でかっ 67 ご清注れ気で 派手に 席宴なは の顔また っ国 にがいる はずむ杯日 繁華 繁華 土たすぎ 歩む 若本多久志選 た否 < ts 立ち 居 SS ì 女街街ず 手むれし 62 0 ズ 一柳茂史柳 三 夫志美好子 奏 雀 滋 一新太干智 綾 恵静 万 醉 古 宣 踊 三之茂万 水子雀 夫助津子子 女朗 馬的 々方介 悦可緑一百好 郎動水栄酒一

> 逆行の 十引ゴ 坪に " 街 し、一、 と 見えしに 喘ぐと 見えし ペン 積まれる 銀座 し の 名ばかりと IJ 初恋 0 い午いぬ 3 飲光 九 繁華 華遠華 街街街街時街街い街

繁華 繁華と 繁宿 0 華 に街 街街 \$ 欲 街一見紳 な 裏に鑑 0 糸 人で れんなじ 通 さてるみれられ T -0 ころっと 店を ポルノ 歩る 85 めかれの てっ 出 東夜な 1 7 旅の Ł 買うて 卷 がのある 5 黒た指 さわら その < いる うまい 宜 大 繁華 繁華 繁華 華くも華し 写 華 華 売かえ る街るの街た L 店独い 街 街 どんたく 小天金静亜 松松 く三香鈍 維維一鬼形千三静雀静智史綾与静綾三一葵葵庸 久久三 万 子子夫遊水子郎歩子歩子好女志馬女郎三水水佑

第 24 大 阪 文化 JII 柳 大 会 *

中開47央会年 11 月 19 日 10 集会室 時開 場12 時

兼講開題演会 司会場 0

> 宏子 郎氏松園

本冬一小柳

日 本語

の

金星

う

繁華

岡橋 塊人選 宣介選 芳川

大阪 (出各 兼句題 当日

文・は25化席出句題

祭川 郷 郡 郡 郡 内 表 表 表 表

柳賞日限

選者賞

受付

入選

句

代二百円当日

申込受付。

 素
 本
 本
 本
 本
 等
 事
 事
 一
 点
 人
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (
 (</li 方をやり

々田恒田

瓢 明

ポストが

3

E

牧明陽

人軒

縮

切 正本

美や手看 しく 相板 a す栗 の蟹 ねて そがてか 娘 甘袋だ ぶなげ え 買け う暗 T 3 12 虹繁 繁華 繁華 の華 華 街街街街街 多久 葉 阴 史重 陽 子軒好

10

7

のゆきどころなき

なる

立.

5

サー

"

静多葵肖綾 香志水二女

ダウン余生は妻とひそと住

たく

ましさ

題「パワー JII 村好 郎

7 1) 7 選

ポンコツの無言でもオ ディスカバージャパン金とパワーが釣り合 ウー グラスの 治以後 き過きは マン グ むらく 10 パワー 10 パワーへ一歩ゆずっている平 7 オー 底にヤングパワー ヤングパワーの ブのなと ヤングパワー ヤング おだてに ルド 歩手前に 性の中に パワー 10 ワー 0 似 っのて押 賞めてく 質が \$ ある調 も認めてる。 10 のありつたけ 金がない 期 落ち 待され かき 和和 n 一滋小緑 之滋好百 静静 馬歩夫 松園 松園 保雀



ヤングパワー 労組 の パワー ブラック。 ポワーで パワーで クック。 内明倖母住老人の 住酒から ウー ウー アイシャドウウーエコノミックパワ ヤングパワー 七転び八起き目 かりる 橋をたたけばパワーに追い マンパワー父ちやんしつかりたのんます 10 マンパワーな子棄てち殺したり 10 ワー 7 パワー + 1 パワー 18 Ŧ ・ング ハワー ヘワー 18 10 10 ワー 7 企業の パワー 顔をかくした 10 ネクタイ 悩み 10 世界の地 をすなおにき パワー ワー ワー マンパワー利等肚 緩急 信をした 壁はまだ厚い 日に 総会屋に 派手にする 使い 図をぬりかえる 踏 が立たず 団結 いてかり 切らせ つか 3 く 別房 悩み 算 か れ 好 葵 多 久 志 一 幸太郎 史凡滋 九 好郎雀 明陽 雀古古小重静 方方 因 子 人馬 軒

王中整冠折形

を 00

0

顔で王冠

王冠へ

13

スト

ウェ

スト

E

"

プ見せ

111

ス

ど緑史葛之鬼夢重 な水好城保遊成人

0 同居を

対

角

線

K

妻

から

60

3 箱

王冠も

してる

おもちゃ

プライバシーも

記

事に され

誠王

を を

王冠

として

子

K

ない

つけると

髭が

ほ

しくなり

手に

面を脱いる自分をみ

狂

1212

仮

面

0

残る出

雀夢幸摩天天葉智春 太天 子成郎郎笑笑子子巢

輝き

王冠の

歴史に

残る血の

0

K

お

62 3

重みにク 右手で

耐えて

7

王高揚

品 3 3

い見立

Ž. 台

は級げね

お

スト 脳天たたかれて 民の 空しさも 7 を クに 浴びて 重みが ばっかりに なって のし 王冠 D 脱ぎっ ンド るビー か 振 遲 連れ塔 尾 栞選 雀藤一百好踊 水生子持栄酒 王五冠 王冠を 王冠を

を \$

ぬすみ

持て

ポンドで

積

かむる

1

ねらう ルパンになろうかな捨てた きれいな 恋 でした

真正面

から 身

ポー

ズ

は

れ

撮売れ

王冠を 王冠の

ット

コンテ

王冠を 王冠を 血ぬられた 王冠 童 脱い ぬいで 王冠 たより なく ピー きれいな 王冠 25 ス で人間の 血の H 楽屋の かぶる 0 淚 から 秘 史 アッ 63 風 顔 役 00 > ・ドン塔 寸 63 こる ま れ 緑史葛之鬼夢重万滋太微弥惠多 人 水好城保遊成人的雀津舟生朗志 小天野葵 松園 迷

-59



原稿用紙にペ 25日着便。 ン書き。 書式は発表誌のように。 文字は 締

わ か

あ死コ新コで城太塚城連少寡鼻死不独煩悶 の角ンルが下影ののでは、 のののでは、 ののでは、 のでは、 のでは 婦の汗勉強 の 死角 へ 企 みのがら ひよっこり のぎがら ひよっこり のぎぬ 顔 から まれに 空 のぞく 82 コンパ 嫌な人 外れ クト ひみ翠佳裕明悦ふつ佐三あいるさ みと一代 おお雨宵美子郎よむ郎代き

0

ン パクト 貰ってからが深うなり跡 は 苔むす 岩が あった だ け付帳の死角嬉しくもあり腹も立ちで 卵 お城の 桜 が まっ 盛 り したかげにつつまし の花川柳会 卵お城の桜が クト的 の敷居 死角を 通うて あ も抗議 で女城 2 いる 手に重い したい つの盛 え 守る 地虫 が飯 な 事故 田 62 悦郎 葵太小千百城柳十雀滋一久 茂松寿 水津園子歩石子郎子雀風司 報

めなどどっ 峰当門日本はの変美し 喜びが 饒舌 垂 しっと見ている 眼が 追っている 釣って 酒 プライバシー 断ちの どん へ引きずりこまれそう りて 浮木が 蛙 饒舌の泣 力的 足 42 酒 忘れ とり言いない 腹をたて 失意の日 るに 流れ られ 肖花牧静太薫百鬼悦雀芳逓 茂 二梢人馬津風酒遊郎子子児 小酔美緑

城のは

限傘 今日 死角にも 9

追われ

いう 名の 死角に 死角 へ 企 み 城子 の 表札に

刃

とぐ

けら

れ見

3 3

下に 住んでいますと が 城 姑 の 城 へ 梅 声 の 死角に 生き てる ま の 死角に 生き てる ま と いう 名の 死角にも

る梅雨

い続日

雨晴れ間 19

日かパクのらク息

クト

私死角へ及角の

がすを

天白政牧照富

クト

いて

0

秘めて

眺められてる指のダイヤへをボース 登山靴 山の 神話を 聞いて 来 る 登山靴 山を 大事に して 呉 れ る 登山靴 別れ ない 足に 折れ合わず 登山靴 別れ ない 足に 折れ合わず 登山靴 別れ ない 足に 折れ合わず 登山靴 見の お古が 気に 入 ら ず む 海 で 夏を 楽しむ 姉いもと 山 登 る 男 は 何 も 考 え ず 山にもう 妬かない 妻でいてくれる キャンバスは夏の景色をほしいまま コーラスが よ あのころとお 今年こそ などと プランを夏にたて のころとおんなじあつい夏が来た 止んでせ 買えない 山道けわしなり 夏をまた迎え

柳会に切のあ 例会に 山の 男 夏 の 陽 へ 炎 吸のある 所は 1 綾好恒柳凡智滋古静一文 九 女一明志郎子雀方香舟秋

地図に

書

(中人) (中人) (中人) (中人) (地) (であって) (短冊) のって) (短冊) のって) (短冊) のって (数元) (を立てる 気 兼 も 平 社 員 では員 もう ライバルを 意識 する チンピラに 横取り された稼ぎで エ 息 子 も 平 で 無 で 利えてつかんだ。 世 平 息 子 も 平 で 無 欠 勤 ナ きびしさを耐えてつかんだプロの味 万 金みは 見せず 白紙 の 貌で いっ 企みは 見せず 白紙 の 貌で いっ かん 見せず 白紙 の 貌で いっ かん りん しょ 平 息 子 も 平 で 無 欠 勤 ナ かん い の で 1 とんぐり川柳会 (大阪市) 谷垣史子を 連れて 行けば 素直に 帰る父 さばる気でないが老いのままならず 父ちゃん の 脱線 予防へ 坊やつけ 療養所 さばる 者 ほど 受けがよく 直線 に 帰 る つもり が 屋 台 店公 害 の 水面 に 浮 ぶ 子連れ 鴨 麻痺の 子を 連れはてしなき 旅 路 取痺の 子を 連れはてしなき ホ 路 か 屋 台 店 嫁がせて さぼ こっそりと 叔父を 殺してサボるっては いても 小鳥の 切り 叩いた 猫 は うちのの 子を 連れはてしなき 旅の 子を 連れはてしなき 旅 子連れ 横取り げて が鮮度を とびに サベに 小鳥の餌 れたよに思う父ベートに食われた 横 取 ら れ さらわ 悪びれる解を摺り 見る れる ず 1 3 一史好報 葵い小好逸幸万文サ わ松 水を園郎雄一作作ョ 章柳一静牧葵君 あ肖市金誓形儀 史緑儀 里き二 雅信栄馬人水子

> となりから子連れのネズミ痩を来る にとなりから子連れのネズミ痩を来る にまっすぐに 人を 信じて 世に 遅れ 修 サラリー を 一 直 線 の 運 び 役 マタの ゴ まり 母親は う を うどん きっちりさばり 生きて 左右を そう めんを から 直 ですます 10 振り 渡 戻っ なる子は 子供連れ て来る 向かず かれ 連 12 鬼酔弥吸悦岳修之花河百 遊々生江郎人史保梢泉合

新喜

一助風

金屏風 祝っ 司会者が 居司会者が 居 て九官鳥に 柳ささや 祝辞値切るにが居眠りしつ。 淋しさじっ 切るに しつつ あしら 0 をもちれれ めてる 河原み 0 英よ無与八み蕪近をされて の鬼志陣る石江む 3 報

限居にはまだなりとうない夢を 黙秘権 隠居 が すれば 肩が z 所 絶 の 釣 へ 隠 居 の 羨 ま 八十 の 峠を 越えて らしく な だかきを 覚えた 頃の 川 が な 犬かきを 覚えた 頃の 川 が な 犬かきを 覚えた 頃の 川 が な プロパ 仲五料プ 人会のをパ 悠々と パンを明治も賞めて する たび れも ボ 払っ ー泳ぎは見せてくれぬもの 覚えた 頃の 川 が な い いしい まファ スもいる ガスを てガスに 乳房 お方が まだ んで なり 妻の な 色気 ま U 0 n 旅鯉のい 越無初百可素トンお合山聖音子住水ボる

それとなく

好きの 転 ホルモン 上六 宅 育てて 転宅 表がにま n 鹿を抱いて までに ッ借 1 L まれ んでる 3 3 喜三古醉小綾恒十 松 图 女 图

がらくたの 捨てるに惜しい 転宅へ 漬物 石 ま で 妻 はい 転宅へ 漬物 石 ま で 妻 はい 転宅へやっぱりがらくたついて なふくろのことを話しているデ 一生を 賭けた 取材と なる デ 性格の 相違 わかって 来た デ 僧しみを 勘違いで もって お伊勢さん大仏さん上六で並上六 まで 大きい 鹿を抱いて 小の友に 消そうとするから < 62 でした 若芽合同句 デー 大は察して書いて去にいつしか感化されていたいつしか感化されていた して 1 を 明治 で妻は しているデート の気に たついてくる た出 す 直 転宅荷 d d デー デー る 積 ま 42 八木摩 男 3 2 1 九 1 雀踊子 郎 一六靖柳喜 龍子子風 夫郎報 富智君 久。 悦肖儀思 文 葵

西出 栄著

紅吊ホ紅ゆれ一方と 夜 ホステスは昨日も今日も処女 和 一点 今だに 寡 婦 と 言いれ残るブランコだから乗っれ だけが 残っ て 閉 明 1+ まで身の振り方 点 気兼 する 程 を 気兼 する り方で泣 て 処女守り 気にも せず 処女といと 言う 市場かご お切れず か閉 き てみる つかれずき 勝弁 つあ大平夜の から 会 けり和気席 れい噂 0 小儀花明逓岳美笑孤柳正真柳志祥明摩鶴誓藤青一夢 松 園一梢朗児人代痴二信朗子影寿月朗郎丸二持香三成 勇政芳昭城淳光 次夫童伸石子治

> バ紅好舟工 きゆ場 1 つか はさい かけで な の意見 紅さな 世 点い町 陽葵太富 一水津子

オ 工 ケ 統川 誇った , ザイン又同じ がある ナー 性 坂 L n 形 太好入形神常有一亜健前創青智平中村 大水 報 郎仙水田夢一扇成坊田三谷也野西川山

覚えてる

るや亡悔度 っきは行 た母 も通の 筀 10 一蹟 (市) 村田駅でらないでらないでらないでらないでらない 害抜難ぼ 一星寿節慶 報 児児世斗子子子

> 同同同同 期期期期 の 4 生者 う同っ期 東海軍は 生 出世 生 恋 もう 枯葉若葉の 差 桜 唄えば 君が かい。 でもころんでも立 でもころんでも立 世 ばかりが 顔 メ 同期でしたに 気が ばい 今っ を争りかばい 合ってる Ħ る外企業 3 見 辻根筎 性心 圭 水 瓢 好 摩宏貴圭柳儀清 天 美 郎子代水信一女

さようならを雲に問くなるように な・・・ びきな色 まだま がきな色 まだま 家と生涯 共に 家と 生涯 共 に すった 船くっては おらぬせ つなぎ句 花 一まだ決まらないと生涯共にナ 多へ 故郷がいとり飛ばされ かい になれ と同期の に問うても居 花 子が日で 小たの 出るテ 生きて の恋破れの恋破れの恋破れの恋破れの恋いのかのかのかのかのかのかのかりのからいい。 年 船 供を で で で で の 3 生 わ すが人過 き字引 3 見え レいるでせて き 7 0 2 商居 E棚美美貞不政峰浄菁英鬼葵日い迷秀酉 報 子雄子朽己泉美居詩焼水夫は仏子合 こふみ水 子合路

められ

156 116

K

児に花火見せに来たのに寝てしまい 早打ちの 花火に 口と 目が ゆがみ 早打ちの 花火に 口と 目が ゆがみ で 捨てて 見 た から 花火 美しい うちわ 持つ ゆとりへ 花火 美しい うちわ 持つ ゆとりへ 花火 美しい 高架から なる 剃刀 の 当りで 剃刀 の ような まる なる 拾った ような 0 剃男に客 決 刀は る食 が眠っら ッ う 水都祭 こぼれ され 給算 任心 " 眉小多 津 水路緒 儀恭南は育石悟や 宏岳眉小 お園拾郎

幸背頂胸安親帯

帯観音

行た

上高

帯帯は 様

0 母しめに

イウ

1

は信

の札へアンの札へアン

を 捨てで

忘れ で

とり I

L

アンコのぬ 知らぬ時方

スモッグの 空へ花火は 火女に 嘘 つきささり

赤板のが

の腕信頼

メメ切っの

た二人の

襖

気を

揉ます ぜりふ

宣伝程に効

き

0

秀漁太

れせ

雅号ぶっちゃけばな

三幸 いるが、 は名誉と実に欲ばった名前である。三幸(ミツユキ)末、一つの幸は健康、二つ目は恒産ができ、三つの幸役所に届けを出す寸前に、父が"気づき他にと考えた 肖って決めたのである。いまから考えると馬 又にしょうと衆議一決した。 104 を風 その当時真剣になって考えたらしい。 靡した噺家がおったらしい。その を近所の人達まで加わり、 IE 男として さて当 一時江戸 生ま 考えた結果 n **応度げては** そこで 私

3 つ

ゅ

本名そのまま雅号となり使ってます 五十

お手手つないで

漁太本徹洛笑力加喜東欣 底 人峰棒舟酔風泉子酔風弥 思案して 返答 しろとは 金の思案して 返答 しろとは 金の思案して 返答 しろとは 金の思案して の思案して 水の の 思案して ある と の と ない まました 孫 は ** 急流を下る舟・ 年寄の思 来客に 思案 しァ 赤字よと 亡き さむ ざむ 粒々と 貯めて 思案の ふところが 思案する間に気の 長い 思案 している 約束ぐ 足音 何思案 してる かう なじ ストライク 倒したピンが。夢に出る ようぼやく奴やと自分もぼや 切る話 案なかば 横から手が出る 合う 夫婦にかげりの 城北明朗 父の 街に の日の日の や廻で 案 する までも 日爪にまで 涙を つつ抜 のある日味方にな 新緑の と一人 せまって湧いて 来る意欲 っぱ 涙を 母が ばやきに して行 武器に けだっ から夏 親子 ぶちょ 思案は 色あり人 似たり ふいて 恋さ P 広 < もととと 助 ない 理想 又値上げ 金のこと 市 無い平 け 特売場 四畳半 いとり p 僧の経 てくれ の案 逃財 場 宮し 呼 湧 追 なり 憩う 布に 籠 泡橋 寺い < ZX. 和 弘春生 秀生つ志賛濁三繁葵太隼シ 対仏ね津平水四子水津人ゲ ます 与晴京早胡至津徳 区居 方女蝶峰 松 戸 蟻雅孤我 否 ゑ生果 無糖巣舟勝

0

な か す U

中筋

と急遽変えたのである。

小学校、

中学校時代サン

は私は実に良い

名前を親達が、

つけてくれたもの

っています。

れ

生に馬鹿にされた記憶がある。

会社経

新年号を飾る「ユーモァ特集 JII 柳塔 社同 人総参加 ! (一人二句 以内)

日時

+

一月八

日

水

午後六時

(いわきそう

阿

倍野区

松崎町一

電話622・1275

モァ味のある川柳で新年号を飾っていただきたいので 柳に忘れられているものはユーモァである。その (十一月二十五日着 便

1

Ш

年賀 です。グループをおもちの 方もご利用ください。 本誌五分の一段が千五百円 広告受付! III 柳

あなたもゼヒーロ

★原稿締切・十一月末日

この寸法が300 になりました

三三三六八番 振替口座大阪 社 Ě

本社十一月句会

席題

= 三題 ★投句だけの 百 当日発表 円

5

大戸橘金若

坂田高井本 形古薫文

各題三句以内厳守 水方風秋 選選選選志

★電話での投句や訂正はご遠慮願います 大阪市南区鰻谷仲之町20

JII 柳

塔

社

腹芸」耐える」

ローン 表沙汰 12月の兼題

兼題 会場 「夜 勲 稼 柳 1 和 ラ 荘

ブ ル 長

方は切手50円封

15 9 小 安 平 谷 次 仙 3/2 Ш 選 選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。

★用紙はなるべく柳笺をご使用ください。

募

玉

岡 Œ

.

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字 は楷書で新かなづかいにしてください。

福 吉

島

鉄 美

児

選

干

取

集 •

課

題

吟 樽 塔

(各題5句以内

初初

荷

天

Ŧ

梢

選

肩

凝

0

原

紅

月

選

発楣

大阪市南区鰻谷仲之町二〇署地

郎

課

題

吟 樽

(各題5

句以内

近作柳

菊 西

沢 尾

小

松

園 栞

選 選

近作柳

(10句) (10句)

菊 西

沢 尾

1

松

園

選 選

昭和四十七年十一月

月二十五日印刷

日発行

栞

二千二百円

(X

#1 料

#

III

柳 塔

JII

柳

(10句) (10句)

新年号発

表

(11月15日締切)

二月号発表

(12月15日

1締切)

一年年分 定 価 百八十円 千百七十円 (送料十六円 (3%)

印刷方大陽印刷 行集 大阪市南区鰻谷仲之町二〇番地 郵便番号 人兼 中 島 五四二 株式 蓬 塔 公会社

振替口座 大阪·三三三六八番電話大阪·二七一—三九八五番 社

ŧ

"はたらくうた"

to

の日にちなんで

おわび

あ

b

++

またかと思われ

執筆

疲労回復・肩こり・神経痛に

公食後すぐのものか 効果的です 合くわしくは医師や薬局・薬店で



さまで ★たうつけ 印刷所 見る人が る。 ているわけであ 柳界展 を 8 4 いるとお 二方的に その S. Crick を担当し わ イイタ を越し おか 7 3

・も上がっ

しサラ

上がっ 本誌も十月

値上げ ていても

らだまっ

内容は新しい。

9絶対しなかった。 きな仕事 あるかっ だけやってき 食えなく

私品香 直らな # ▼近頃変 悲し らせん。 水をふりまし は安物 を書い 変った。 まず手始めに便笺 葉子コーナ いことです 力多 た事をし なりまし つくそうで、 にプラ 4 ありなる

すので、スト 大田 の がに スト で、スト で、スト で、スト ってきて、 長が席をた 長が席をた 大の のように 烙お用★は失格 印か工とん格 れても場 す 席をた 「ストー かそ からおさ 逃げるように走り なれ三 手のひ 帯を 子のひらをあわった隙をみては、たちは工長や伍にちは工長や伍にちば工長や伍にちば工長や伍にちば工長や伍にちば工長や伍にちば工長や伍にちばいた。 工場 をとっては からホ 時 て腰たやをの 九中 ス つお

本を

主門た。 ない あ 生ま 二代目で、 を 40 者 仕方がな 提げ P なヤツを けに回 いを 落と らかき

> ないと思っ らヤケになっれなんで。 米英 女 をやっつける兵器 一そんなど それと釣 がか大か

> > が配給

委員に選ばれ、

券をほ

to

Tours,

40

することに

配給には徴用工も

10

でもな

をぼく で、★ 東 が発集 干中 つつえ 発集になり と - K 部 3 to 長が てしま 神 お 社員が 一句入選 務 あ

世界で始めての立体動物園や。 体の人形が歌い踊る 世界はひとつ 大人形館、急流すべりやジェットコ スターなど。 楽しさかいっぱいノ Bonos 阪急電車宝塚駅下車 入園料···200円·100円

★お するようになっ 工★ P 2 借み 長まで 8 いる。 に働 FI れなら 才 と、いつ いたから だった。 ツルかし カを券た

創刊大正十三年 通巻五四六 昭和四十七年十月—1年第行 (毎月一日 昭和四十七年十月—1年第一 印 岡 昭和四十七年 一月 九 日 第三種節編

" 塔 十一月号

JII

一定価 百八十円 (送料十六円)

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海サービスチェーン

<ホテル・旅館>

◆白浜温泉 国際観光旅館 朝 日 国際観光ホテル ホテルパシフィック

◆湯峰温泉 国際観光旅館 湯 の 峯 荘

◆新和歌浦

民際観光旅館 萬 波

お問合せ・お申込み 南海交通社 日本交通公社・サービスチェーン 大阪案内所 06-(631)-0222

◆徳島鳴門 中際観光旅館 鳴

PS

同語観光旅館鳴門公園ホテル

- ◆紀北橋本 観光旅館 紀 の 川 苑
- ◆泉南淡輪海岸 観光 旅館 淡 の 輪 苑
- ◆大阪なんぱ ホ テ ル 南 海





宮内庁 御用達 菊正宗酒造株式会社 神戸・灘・御影 一番よい酒

うまい酒

清

